

白川遺跡

(久留米俘虜収容所跡)

— 第18次発掘調査報告 —

平成31年(2019)3月

久留米市教育委員会

白川遺跡

(久留米俘虜収容所跡)

— 第18次発掘調査報告 —

平成31年(2019)3月

久留米市教育委員会

序

筑紫平野の中央部に位置する久留米市は、九州一の河川である筑後川と耳納連山の山並みに代表される水と緑が豊かな都市です。一方で、少子高齢化や高度情報化などの社会環境の変化に対応するために、本市では市民と行政がパートナーシップの理念の基に協働し、質の高い生活中心の街づくりを推進しております。また、豊富な水と緑を活かした、歴史が見えるまちづくりを実現するため、歴史風土の継承に尽力しているところです。

この恵まれた環境と立地は、今日を生きる私たちだけでなく、先人の生活や社会・文化にも多大な影響を与えてきました。先人の足跡は、市内各所に存在する文化財として現代に残されています。私ども教育委員会では、開発によって失われる、先人の残した貴重な文化財を後世に伝えて行くために、現状保存、あるいは発掘調査を行い、記録保存の措置を講じています。

今回、本書で報告する白川遺跡は国分町に位置します。発掘調査では、古代から中世の建物跡や溝、井戸を発見したほか、第一次世界大戦に伴い設置された久留米俘虜収容所の遺構を発見し、久留米の近代を語るうえで重要な資料を得ることができました。本書が地域史や外交史の研究、学習の一資料として、また文化財保護行政に対する理解とその普及の一助として役立つことができれば幸いに存じます。

なお今回の発掘調査に際して、土地所有者の昭和建設株式会社の皆様をはじめ、近隣住民の皆様にも多大なご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

平成31年3月31日

久留米市教育委員会
教育長 大津 秀明

例 言

1. 本書は、宅地分譲に先立ち昭和建設株式会社（代表取締役 戸田誠二）の委託を受けて実施した、白川遺跡第18次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の西拓巳が担当した。
3. 遺構の測量は、西と発掘調査臨時職員の大淵文子、山田治代が行った。測量はトータルステーションで三次元データを取得し、株式会社CUBIC製実測ソフト「遺構くん cubic」で編集・保存した。ただし、土層と地下式礎石、遺物出土状況は手測り（1/10）で記録した。製図は、西と専任非常勤職員の今村理恵、発掘調査整理臨時職員の山元博子が行った。製図はデジタルトレースで行い、「遺構くん cubic」と米アドビシステムズ製の製図ソフト「Adobe Illustrator」を用いた。
4. 遺物の実測は、西と専任非常勤職員の宮崎彩香、発掘調査整理臨時職員の石崎玲子、江口里織が行った。拓本は、職員の小澤太郎と今村、宮崎、発掘調査整理臨時職員の横井理絵が作成した。製図は、ロットリングを用いて西と宮崎が行った。
5. 遺構写真は、マミヤ RB67 を用いて西が撮影した。フィルムは6×7判で、モノクロームは富士フィルム「ネオパン 100ACROS」、カラーリバーサルは富士フィルム「プロヴィア 100 F」を用いた。
6. 遺物写真は、リコーPENTAX K-1 II デジタルカメラを用いて、久留米市埋蔵文化財センターにおいて西が撮影した。
7. 図面の方位は座標北を示す。基準点の座標は、国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を用いた。なお、座標は熊本地震に伴うパラメータ補正を実施した。
8. 本書で使用した遺構の略記号は、以下のとおりである。

| | | | |
|-------|-------------|-----------|-------|
| SA-柱列 | SB-掘立柱建物 | SD-溝 | SE-井戸 |
| SK-土坑 | SP・P-柱穴・ピット | SX-その他の遺構 | |
9. 過去の調査で検出した遺構は、遺構番号に調査次数を付記した。

（例）第6次調査の掘立柱建物SB 43 → 6 SB 43

10. 土層の土色は、『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社、昭和45年）に拠った。
11. 遺物実測図と遺物観察表、写真図版の遺物番号は全て同一である。
12. 遺物実測図の凡例は以下のとおりである。
- ・遺物の断面黒塗りは須恵器、表裏面のトーンは黒色部や使用面の範囲を示す。
 - ・調整の線は、実線「—————」が明瞭な稜線を、間隔が長い破線「— — — —」が不明瞭な稜線を、一点鎖線「- - - -」が回転ナデを、間隔が短い破線「| - - - -」がケズリを示す。
13. 遺物観察表の凡例は、以下のとおりである。
- ・黒色土器のうち、A類は内面のみ黒色の土器（いわゆる内黒土器）を、B類は全面が黒色の土器を指す。
 - ・法量の単位はcmである。また、[] は復元値を、() は残存値を、- は欠損または該当する部位が無いことを示す。
 - ・胎土の色調は、『新版 標準土色帖』に拠った。
 - ・胎土は、0.5mm未満の砂粒を「微砂粒」、1mm未満を「細砂粒」、1mm以上を「砂粒」とした。
 - ・貿易陶磁器の分類は大宰府分類を用い、『大宰府条坊跡Ⅳ 陶磁器分類編』（太宰府市の文化財第49集、太宰府市教育委員会、平成12年）に拠った。
 - ・登録番号は、久留米市市民文化財文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。

(例) 201719 — 000001

調査番号

登録番号

14. 出土遺物や図面、写真等諸記録は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管され、活用される。第Ⅳ章で示した写真は、久留米市文化財収蔵館において保管している。
15. 戦争捕虜について、日本では第二次世界大戦まで「俘虜」を公式用語として用いた。しかし、今日「俘虜」は用いられていないことから、「久留米俘虜収容所」のように当時の固有名詞に関わる表現以外は、原則として「捕虜」を用いた。
16. 本調査の略記号はS G O - 018、調査番号は201719である。
17. 本文の執筆と編集は西が行った。

本文目次

| | |
|-----------------------|----|
| I. はじめに | 1 |
| 1. 調査に至る経緯 | 1 |
| 2. 調査の体制 | 1 |
| II. 位置と環境 | 2 |
| III. 調査の記録 | 4 |
| 1. 調査の目的と経過 | 4 |
| 2. 基本層序 | 4 |
| 3. 検出遺構 | 5 |
| 4. 出土遺物 | 21 |
| IV. 総括 | 28 |
| 1. 古代の遺構について | 28 |
| 2. 中世の溝について | 29 |
| 3. 久留米俘虜収容所の遺構について | 29 |
| 4. 下士卒バラック出土のビール瓶について | 30 |
| 報告書抄録 | 巻末 |

挿図目次

| | |
|---------------------------------|----|
| 第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000) | 2 |
| 第2図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500) | 3 |
| 第3図 調査区配置図 (1/800) | 4 |
| 第4図 南区西壁中央部・北区北壁中央部土層図 (1/30) | 4 |
| 第5図 白川遺跡第18次調査遺構配置図 (1/100) | 折込 |
| 第6図 SA 65 実測図・土層図 (1/40、1/20) | 5 |
| 第7図 SB 4 実測図・土層図 (1/60、1/20) | 6 |
| 第8図 SD 76・101・126 断面図 (1/20) | 7 |
| 第9図 SE 55 実測図・土層図 (1/40) | 8 |
| 第10図 SK 80・85・155 実測図 (1/40) | 9 |
| 第11図 SX 100 実測図・土層図 (1/40、1/20) | 10 |
| 第12図 SX 105 実測図・土層図 (1/40、1/20) | 11 |
| 第13図 SD 120・125 断面図 (1/40) | 12 |
| 第14図 SB 1 実測図・土層図 (1/60、1/20) | 13 |
| 第15図 SB 1 P 3・5～7 実測図 (1/20) | 14 |
| 第16図 SB 2 南部実測図 (1/60) | 16 |

| | | |
|--------|------------------------------------|----|
| 第 17 図 | SB 2 北部実測図 (1/60) | 17 |
| 第 18 図 | SB 2 P 3・11～14・17・19～22 土層図 (1/20) | 18 |
| 第 19 図 | SB 2 P 17・22 実測図 (1/20) | 19 |
| 第 20 図 | SB 3 実測図・土層図 (1/60、1/20) | 20 |
| 第 21 図 | SB 3 P 1～3 実測図 (1/20) | 21 |
| 第 22 図 | 出土遺物実測図 1 (1/4) | 22 |
| 第 23 図 | 出土遺物実測図 2 (1/4) | 23 |
| 第 24 図 | 出土遺物実測図 3 (1/2、1/4) | 24 |
| 第 25 図 | 出土遺物実測図 4 (1/2、1/4) | 25 |
| 第 26 図 | 白川遺跡第 6～18 次調査主要遺構配置図 (1/300) | 折込 |
| 第 27 図 | 都市計画図と建物跡、久留米俘虜収容所の合成図 (1/2, 500) | 30 |
| 第 28 図 | 写真に見る久留米俘虜収容所のビール瓶 | 31 |

表 目 次

| | | |
|-------|-----------|----|
| 第 1 表 | 出土遺物観察表 1 | 25 |
| 第 2 表 | 出土遺物観察表 2 | 26 |
| 第 3 表 | 出土遺物観察表 3 | 27 |

図 版 目 次

| | | | |
|----------|-----------------------|----------|-------------------------|
| 図版 1 (1) | 北区全景 (南西上空から) | (5) | SD 120 完掘状況 (北東上空から) |
| (2) | 南区全景 (北東上空から) | (6) | SD 125 完掘状況 (北東上空から) |
| 図版 2 (1) | SA 65 完掘状況 (北から) | (7) | SB 1 北部完掘状況 (北東上空から) |
| (2) | SB 4 完掘状況 (南西から) | (8) | SB 1 南部完掘状況 (北東上空から) |
| (3) | SD 76 土層 (北から) | 図版 4 (1) | SB 1 P 5 礎石検出状況 (北東から) |
| (4) | SE 55 土層 (南東から) | (2) | SB 1 P 6 礎石検出状況 (南東から) |
| (5) | SE 55 掘削状況 (南西上空から) | (3) | SB 1 P 7 遺物出土状況 (北東から) |
| (6) | SK 80 完掘状況 (北西から) | (4) | SB 1 P 8 土層 (北東から) |
| (7) | SK 85 完掘状況 (北東から) | (5) | SB 2 北部完掘状況 (北東上空から) |
| (8) | SK 155 完掘状況 (南から) | (6) | SB 2 南部完掘状況 (南東上空から) |
| 図版 3 (1) | SX 100・105 検出状況 (北から) | (7) | SB 2 P 3 土層 (南東から) |
| (2) | SX 100 土層 (南東から) | (8) | SB 2 P 17 礎石検出状況 (南西から) |
| (3) | SX 105 土層 (北から) | 図版 5 (1) | SB 2 P 18 礎石廃棄状況 (北東から) |
| (4) | SX 100・105 完掘状況 (北から) | (2) | SB 2 P 20 礎石廃棄状況 (南東から) |

図版5 (3) S B 2 P 21 土層 (北東から)

(4) S B 2 P 22 礎石検出・遺物出土状況
(南東から)

(5) S B 3 北部完掘状況 (北東から)

(6) S B 3 P 1 礎石検出状況 (北西から)

(7) S B 3 P 2 礎石検出状況 (北東から)

(8) S B 3 P 3 礎石検出状況 (北東から)

図版 6 出土遺物写真1

図版 7 出土遺物写真2

図版 8 出土遺物写真3

図版 9 出土遺物写真4

図版10 出土遺物写真5

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

本調査は、宅地分譲に伴う事前の発掘調査である。平成29年9月26日、土地所有者の昭和建設株式会社（代表取締役：戸田誠二氏）から、久留米市国分町171番14における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である白川遺跡と久留米俘虜収容所跡の中にあたり、隣接する白川遺跡第6～17次調査では、古代や久留米俘虜収容所の遺構を検出したため、10月2日に宅地道路部分の発掘調査が必要である旨を回答した。同日、土地所有者から発掘調査の依頼が提出されたため、土地所有者と久留米市は、11月20日付で白川遺跡第18次調査の協定書と委託契約を取り交わした。現地での発掘調査は、平成30年1月9日から3月19日まで行った。遺物整理と報告書作成は、平成30年度に白川遺跡第18次調査報告書作成の委託契約を取り交わして、平成31年3月31日まで行った。調査面積は277㎡である。

2. 調査の体制

| | 平成29年度 | 平成30年度 |
|----------------|-----------------|--------|
| 調査主体：久留米市教育委員会 | 教育長： 大津 秀明 | 大津 秀明 |
| 調査総括：久留米市市民文化部 | 部長： 野田 秀樹 | 松野 誠彦 |
| | 文化芸術担当部長： 甲斐田忠之 | 宮原 義治 |
| | 次長： 西村 信二 | 西村 信二 |
| 文化財保護課 | 課長： 馬場 博文 | 水島 秀雄 |
| | 課長補佐： 山崎万里子 | 久保田由美 |
| | 課長補佐兼主査： 白木 守 | 白木 守 |
| | | 丸林 禎彦 |
| | 主査： 水原 道範 | 水原 道範 |
| | 事務主査： 塚本 映子 | 塚本 映子 |
| | 庶務担当： 豊福 早苗 | 市村久美子 |
| 発掘調査・報告書作成担当： | 西 拓巳 | 西 拓巳 |
| 整理担当（専任非常勤職員）： | | 今村 理恵 |
| | | 宮崎 彩香 |

発掘調査臨時職員（平成29年）

秋永 絹子、井上 知義、江藤 光男、大熊 澄子、大塚ヒロ子、大淵 文子、川原 初美
川原 光貴、黒肱 昭裕、佐田農夫男、田中とし子、日吉 政勝、松尾 朱美、矢野 崇徳
山田 治代

発掘調査整理臨時職員（平成30年）

石崎 玲子、江口 里織、横井 理絵

II. 位置と環境

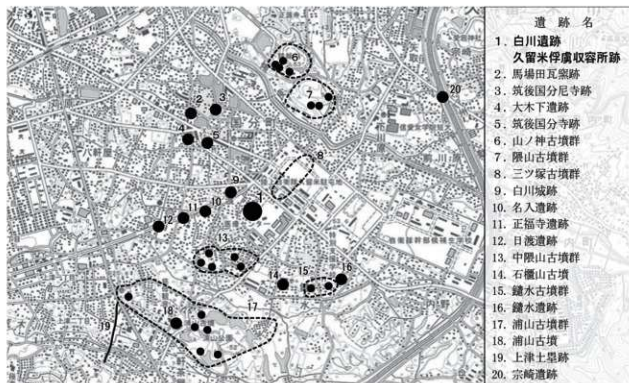
久留米市は筑後川の中流域に位置する。久留米市の南東部を走る耳納山地の西端には、標高312.3mの高良山が聳え、さらに西方には高良山から派生する洪積台地と高良川によって形成された扇状地が広がる。白川遺跡は洪積台地に位置し、第18次調査地点は標高約34.5～35mに立地する。

周辺での最古の遺物は、日渡遺跡や白川遺跡で出土した縄文時代早期の押型文土器である。後期になると、白川遺跡や筑後国分寺跡、正福寺遺跡で土坑が検出され、大木下遺跡と名入遺跡でも土器が出土したことから、集落域としての利用が想定される。正福寺遺跡第7次調査地点では、谷部に後期の土坑群が形成される。出土した滑石製大珠や140点の編組製品は全国的にも稀な資料で、刃部が装着された状態で出土した直柄石斧は、縄文時代の石斧としては全国唯一の例である。

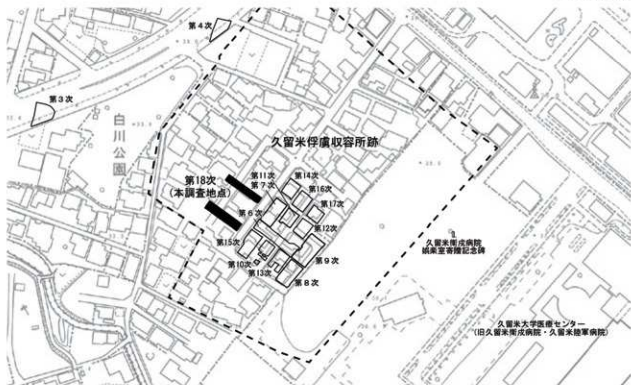
弥生時代には、筑後国分寺跡で中期と後期後葉の堅穴住居が各1基検出されているほか、日渡遺跡で後期の堅穴住居や掘立柱建物が検出されており、集落の分布が示唆される。日渡遺跡では、遺構に伴う出土品ではないが船載の内行花文鏡が出土しており、有力層の存在が想定できる。

周辺の古墳群は、山ノ神古墳群や隈山古墳群、中隈山古墳群、鎌水古墳群、浦山古墳群が挙げられ、白川遺跡東側には三ツ塚古墳群があったと伝わる。これらの中でも、くちなし玉が出土した隈山古墳群2号墳と、家形石棺を有する石櫃山古墳、家形石棺に文様が刻まれた浦山古墳が目目できる。

古代には、調査地点の北西約500mに筑後国分寺と国分尼寺が設置された。『続日本紀』天平勝宝8年(756)条に九州各地の国分寺と共に名があることから、8世紀半ばには整備されていたとみられる。国分寺と国分尼寺の周辺では、瓦を供給した馬場田瓦窯跡が位置するほか、白川遺跡で



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)

世紀後半～9世紀前半の堅穴建物や、道路跡とみられる9世紀の並走する溝、9世紀後半の埋納ピットを検出しており、国分寺に付随する施設や集落の存在が想定される。白川遺跡の南西1.4kmには、丘陵の間を横切る上津土塁が築かれる。白村江の戦い以降の大宰府防衛のために築かれたと考えられるが、発掘調査では液状化に伴う崩落痕が見つかり、『日本書紀』天武天皇7年(678)条に登場する筑紫地震による崩落と修復の様子が窺える。日渡遺跡では、10世紀初頭の土坑から「朝」銘の銅印が出土した。古代の創建と伝わる正福寺や、『高隆寺縁起』弘仁元年(810)3月条に御井郡司として登場する草部鶴見麻呂との関連が示唆される。国分寺と国分尼寺は10世紀以降の律令体制の衰退に伴い規模を縮小していったとみられ、11世紀代を最後に遺構は見られなくなる。一方で、白川遺跡では10世紀の土壇墓や10～12世紀頃の土坑が見つかっており、国分寺と国分尼寺の衰退後も、集落が継続して存続したと考えられる。

中世の遺構は、鍾水遺跡で12～13世紀の溝、白川遺跡で14～15世紀の溝が見つかっており、直角に折れ曲がる平面形や断面の形状などから、方形館の存在が示唆される。また、大木下遺跡の土壇墓や宗崎遺跡の土坑が集落の点在を窺わせる。白川城は、高良山座主家の一族である丹波良運の居城と伝わる。

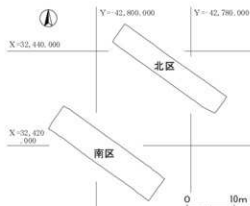
近代以降、畑だった調査地点は大正3年(1914)に始まった第一次世界大戦に伴い、久留米衛戍病院(後に久留米陸軍病院、現・久留米大学医療センター)の新病舎が建設された。この新病舎は、大戦の長期化に伴う久留米俘虜収容所の統合先に指定され、大正4年(1915)6月9日に市内各地と福岡、熊本の俘虜収容所から移送された1,319名の捕虜が収容された。以降、大正9年(1920)3月12日の閉鎖までの約5年間は、俘虜収容所として運用されている。

III. 調査の記録

1. 調査の目的と経過

今回の調査は、第6～17次調査で検出されている古代の遺構や久留米仔腐収容所の遺構を確認することを目的に実施した。なお造成道路の配置から、調査区は第3図のとおり南北で2ヶ所設けた。

平成30年1月9日、重機で調査区の表土を剥いだ後に遺構検出を行い、南区の遺構から掘り下げを開始した。遺構の掘り下げと並行して、実測や写真撮影などの記録を行い、2月20日には北区の遺構掘り下げに入り、記録作業も並行して行った。当初、3月9日に気球による空撮を行う予定だったが、降雨と重なり実施できなかった。その後も空撮予定日と雨天が重なる日々が続くため、止む無く3月15日に高所作業車で調査区全景を撮影した。追加の調査を経て、3月17日に調査区の埋め戻しを行い、19日に器材を撤収して、現地での発掘調査を終えた。

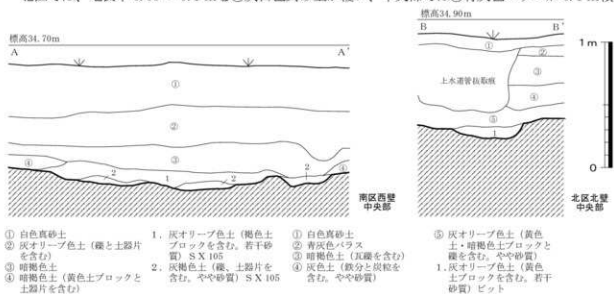


第3図 調査区配置図 (1/800)

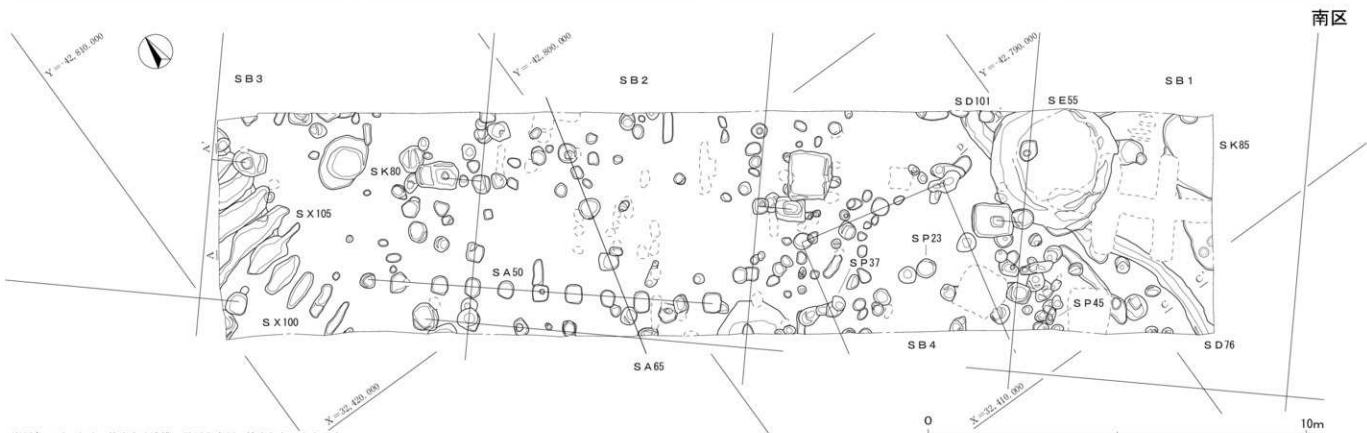
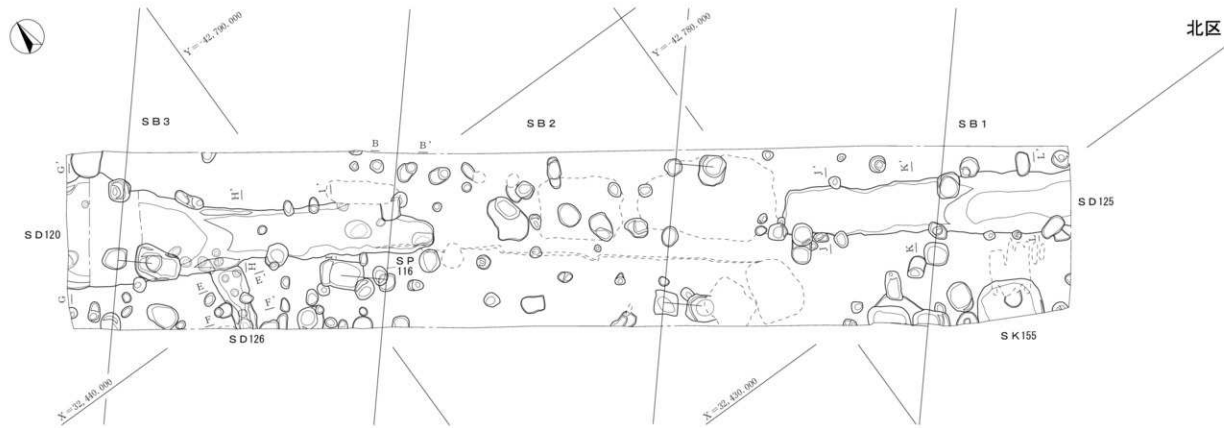
2. 基本層序

調査地点は調査着手時点で更地だが、以前は市営山畑住宅の敷地であった。南区西壁の土層は、地表下0.1～0.2mを①市営山畑住宅の解体後に敷かれた白色真砂土が覆い、直下に瓦礫を含む暗褐色土が0.2～0.3m見られる。これら表土の下層に、②礫や土器片を含む灰オリーブ色土が0.2～0.4m積み、厚さ0.1～0.3mの③暗褐色土と厚さ0.1mの④黄色土ブロックと土器片を含む暗褐色土を経て、地表下0.8～0.9m、標高34.7～34.8mで地山面に至る。

北区では、地表下0.05～0.1mを①灰白色真砂土が覆い、中央部では②青灰色バラスが0.1m積み



第4図 南区西壁中央部・北区北壁中央部土層図 (1/30)



※灰色のピットは、後出する遺構の壁面や底面で検出したことを示す。

第5図 白川遺跡第18次調査遺構配置図 (1/100)

る。この層は上水道管抜取跡が後出することから、山畑住宅の表土と見られる。調査区西部では、加えて厚さ0.1mの瓦礫を含む黒褐色土が見られる。これらの層の下は、厚さ0.2～0.3mの③瓦礫を含む暗褐色土を経て、調査区西部では地表下-0.45m、標高34.25mで地山に達する。調査区中央部では、さらに④鉄分や炭粒を含む、やや砂質の灰色土が0.2m見られ、厚さ0.1～0.2mの⑤黄色土・暗褐色土ブロックや礫を含む、やや砂質の灰オリブ色土を経て、地表下-0.6～0.75m、標高34.05～34.1mで地山面に至る。遺構は地山面で検出した。地山は、南区と北区西部が灰白色～黄色粘質土、北区東部が礫を含む黄色砂質土である。

3. 検出遺構

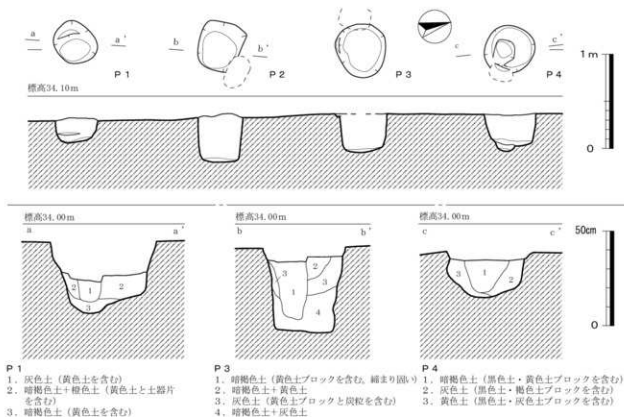
遺構密度は高いが、北区中央部は攪乱が著しく遺構の大半が削平されていた。主な遺構として、古代の柱列1条、掘立柱建物跡1棟、溝3条、井戸1基、土坑3基、その他の遺構2基、中世の溝2条、近代の柱列1条、建物跡3棟を検出した。以下、年代順に述べる。

古代の遺構

柱列

SA 65 (第6図、図版2)

南区西部で検出した遺構である。両端は調査区外に延び、検出したのは柱穴4基4.6m分である。柱穴は上面径0.42～0.58m、底面径0.14～0.46m、深さ0.27～0.52mを測り、柱穴の間隔は、1.5mで均等に配置されている。方位はN-14.5°-Eである。埋土は第6図のとおりで、P2の埋土は灰色土・黄色土ブロックを含む黒褐色土である。遺物は、土師器の坏蓋や坏の細片が出土した。

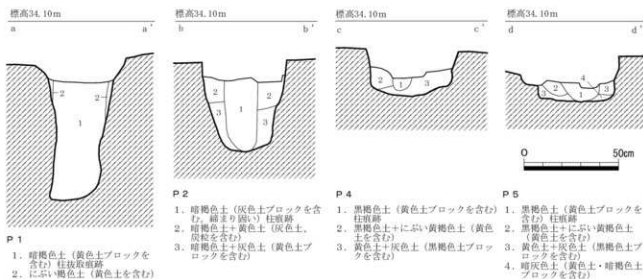
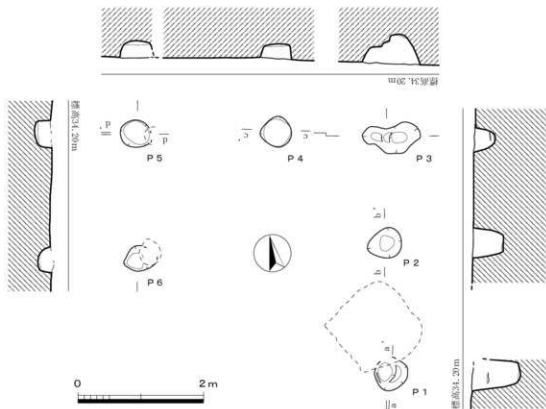


第6図 SA 65実測図・土層図 (1/40, 1/20)

掘立柱建物

SB4 (第7図、図版2)

南区南東部に検出した遺構である。遺構の南部は調査区外に及び、検出したのは桁行 (P1~3・P5~6)・梁行 (P3~5) ともに2間分である。P1とP3の距離は3.8m、P3とP5の距離は4.2mを測る。柱間の間隔は、P1-P2間とP5-P6間で2.1mを測るほかは、P2-P3間



第7図 SB4実測図・土層図 (1/60, 1/20)

が1.7 m、P3-P4間が1.95 m、P4-P5間が2.2 mを測る。計画方位は $N-13^{\circ}-E$ である。柱穴は歪な円形の平面を有し、上面径0.42~0.91 m、底面径0.27~0.46 m、深さ0.21~0.78 mを測る。P1とP3は、底面に複数の段を有する。埋土は第7図のとおりで、土層を観察したP1~2・4~5のいずれでも、柱痕跡とみられる黄色土や灰色土を含む褐色土系の層を確認した。掘方は、灰色土や黄色土、褐色土が主体である。出土遺物は、土師器の坏や埴の底部、坏蓋の口縁部、甕の胴部、黒色土器A類の埴の底部、縄文土器の破片があるが、大半が図示できない細片である。

溝

SD 76 (第8図、図版2)

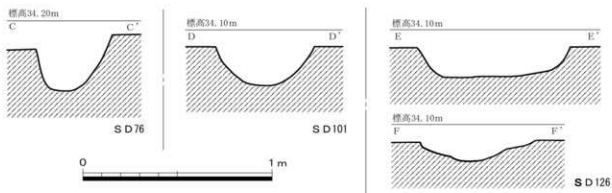
南区南東隅を南北方向に走る溝である。南端は調査区外に延び、北端は攪乱に削平される。長さ3.6 m以上、上面幅0.37~0.47 m、底面幅0.37~0.47 m、深さは最大で0.31 mを測る。走行方位は $N-8^{\circ}-E \sim N-27^{\circ}-W$ で、平面形は緩やかに弧を描く。埋土は、黄色土ブロックや土器片を含むにぶい褐色土である。遺物は、土師器の坏や埴、甕、黒色土器A類の細片が出土した。

SD 101 (第8図)

南区東部北寄りを走る溝である。北端は調査区外に及び、南端はSE 55に削平される。長さ1.41 m以上、上面幅0.52~0.56 m、底面幅0.20~0.35 m、深さは最大で0.35 mを測る。走行方位は $N-6^{\circ}-E \sim N-6^{\circ}-W$ で、平面形は緩やかに弧を描く。埋土はにぶい褐色土で、黄色土ブロックや礫を含む。出土遺物は、土師器や黒色土器A・B類の細片、須恵器、古瓦、縄文土器がある。

SD 126 (第8図)

北区西部南寄りを南北方向に走る溝である。南端は調査区外に延び、北端はSD 120に削平される。走行方位は $N-11^{\circ}-E$ である。長さ1.9 m以上、上面幅0.59~0.82 m、底面幅0.09~0.61 m、深さは最大で0.16 mを測る。埋土は、土器片を含むにぶい褐色土が占める。遺物は、土師器の坏や埴、甕の破片に加え、黒色土器A類の埴、黒色土器B類の細片が出土した。



第8図 SD 76・101・126 断面図 (1/20)

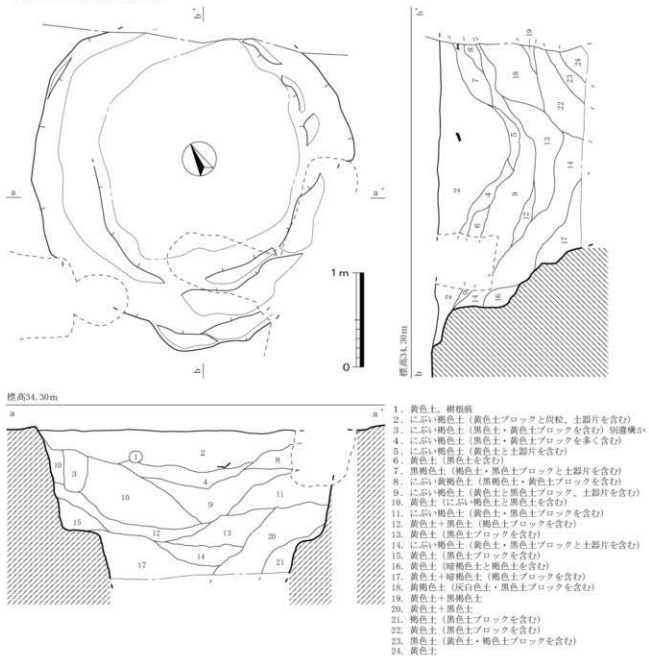
井戸

SE 55 (第9図、図版2)

南区東部北寄りで検出した井戸である。北端は調査区外に延び、南部は攪乱に削平される。上面の直径は3.22~3.44 mを測る。遺構の一部が調査区の壁面にかかり、湧水も著しいため、安全上

III. 調査の記録

深さ約 1.5 m のみ掘削した。底面は複数の段を有し、深さ約 1.0 ~ 1.4 m に集中する。埋土は第 9 図のとおりで、にぶい褐色土と黒色土、黄色土が占める。にぶい褐色土は遺構の上層に分布し、中層から下層は黒色土と黄色土が占める。黄色土は砂質で、地山の黄色土と色調が類似することから、壁面の崩落土と考えられる。出土遺物は多く、調査全体の遺物総量の 4 分の 1 を占める。土師器の坏や皿、埴、甕が大半を占めるほか、黒色土器 A 類の埴がまとまって出土した。このほか、黒色土器 B 類の埴、須恵器の坏蓋や坏、皿、甕、壺、灰釉陶器の壺、格子目叩きや縄目叩きの古瓦、焼成粘土塊や土鏝、錠とみられる鉄棒や鉄滓といった鉄製品、黒曜石やチャートの剥片、炭化材、縄文土器の細片が出土した。



第 9 図 SE 55 実測図・土層図 (1/40)

土坑

SK 80 (第10図、図版2)

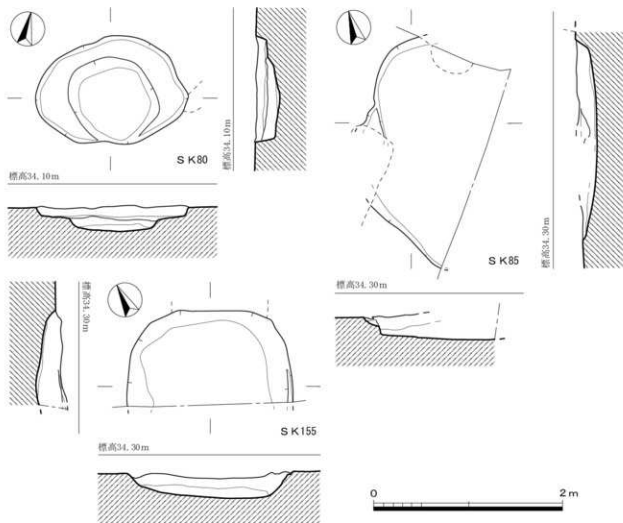
南区北西部で検出した土坑である。いびつな楕円形の平面を有する。長さ1.62 m、幅1.16 mを測る。深さは最大で0.29 mを測り、深さ0.1～0.15 mに段を有する。埋土は暗褐色土が占め、黄色土と土器片を含む。遺物は、土師器の坏や甕が出土した。

SK 85 (第10図、図版2)

南区北東隅で検出した土坑である。調査区外に及び、検出したのは長さ2.52 m、幅1.58 mのみである。深さは最大で0.22 mを測り、土坑の西壁には深さ0.04 mに段を有する。埋土は、黄色土ブロックや土器片を含む褐色土が占める。出土遺物は、土師器の坏や皿、埴、甕、把手、ミニチュア土器、須恵器の壺や甕の胴部片、被熱により変色した箇所を有する片岩がある。

SK 155 (第10図、図版2)

北区南東隅で検出した土坑である。遺構の南部は調査区外に及び、隅丸方形の平面を有するとみられる。検出したのは長さ1.76 m、幅1.03 mのみで、深さは最大で0.39 mを測る。埋土は黒褐色



第10図 SK 80・85・155実測図 (1/40)

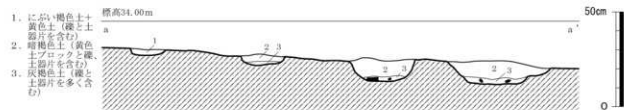
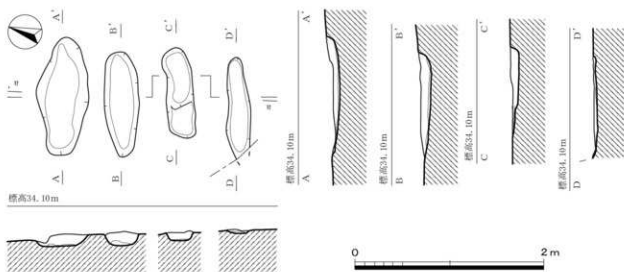
III. 調査の記録

土が占め、土器片を含む。遺物は、土師器の坏や皿、甕、把手、黒色土器A・B類の坏や埴、須恵器の甕や壺の胴部片、焼成粘土塊、焼石が出土した。

その他の遺構

S X 100 (第11図、図版3)

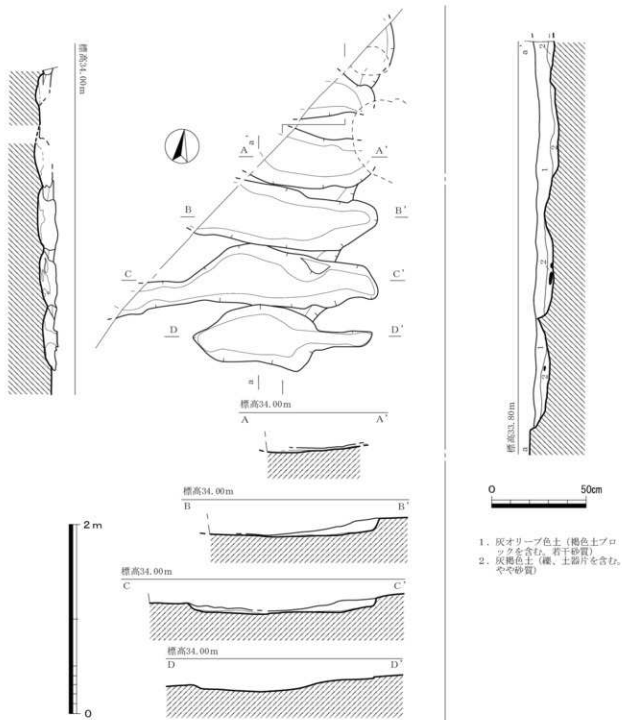
南区北西端で検出した、歪な楕円形のピット4基で構成される遺構である。南端の一部は調査区外に及ぶ。総延長は2.23 mで、遺構の方位はN-15°-Wである。ピットは、長軸長0.96~1.18 m、短軸長0.22~0.56 m、深さ0.04~0.12 mを測る。埋土は第11図のとおりで、黄色土を含む褐色土で占められる。埋土には、礫や土器片が多く含まれていた。出土遺物は、土師器の坏や器種不明の破片、黒色土器A類の埴、須恵器の甕や壺、古瓦、焼成粘土塊がある。いずれも図示できない細片で、磨耗が著しい。



第11図 S X 100 実測図・土層図 (1/40, 1/20)

S X 105 (第12図、図版3)

南区北西端で検出した、歪な楕円形のピット6基で構成される遺構である。遺構の方位はN-7°-Wで、S X 100 と異なることから遺構番号を分けた。遺構の北西部は調査区外に及び、遺構の北東部ではS B 3 P 1やピットが後出する。検出した総延長は3.67 mで、ピットは長軸長1.89~2.82 m以上、短軸長0.48~0.66 m以上、深さは最大で0.19 mを測る。埋土は第12図のとおりで、褐色土ブロックを含む灰オリーブ色土と、礫や土器片を含む灰褐色土で二分される。いずれも若干砂質を帯びる。遺物は、土師器の坏や埴、甕、黒色土器A・B類の埴、須恵器の甕や壺、焼成粘土塊、



第12図 SX 105 実測図・土層図 (1/40, 1/20)

鉄片、黒曜石や安山岩の剥片が出土した。いずれも SX 100 出土遺物と同様に磨耗が著しく、大半が図示できない細片である。なお SX 100 と SX 105 の検討は、第IV章の総括で行う。

中世の遺構

溝

SD 120 (第13図、図版3)

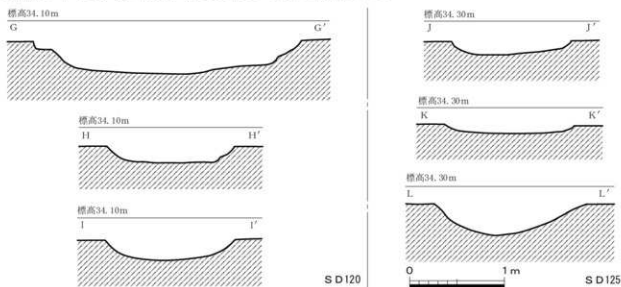
北区西部を北西-南東方向に走る溝である。西端は調査区外へ及び、SB 2・3やピット、攪乱

Ⅲ. 調査の記録

が後出する。走行方位は $N-55^{\circ}-W$ である。長さ9.6m以上、上面幅0.69～3.02m、底面幅0.56～2.44mを測る。深さは溝の東西で異なり、東部は削平が著しく最大でも0.1m程度だが、西部は最大で0.26mを測る。埋土は黄褐色土が占め、砂質気味で礫を多く含む。遺物は、土師器の坏や皿、埴、土鍋に加え、黒色土器B類の埴、須恵器甕の胴部片、黒曜石の剥片、鉄滓が出土した。

SD 125 (第13図、図版3)

北区東部を北西-南東方向に走る溝である。東端は調査区外へ及び、西端はビツに削平される。走行方位は $N-57^{\circ}-W$ である。長さ7.7m以上、上面幅1.17～1.61m、底面幅0.56～1.23mを測る。SD 125の深さも溝の東西で異なり、西部は削平が著しく0.1mにも満たないが、東部は最大で0.35mを測る。埋土は、土器片を含む黒褐色土と灰褐色土で二分される。出土遺物は、土師器の坏や皿、甕の細片、黒色土器A・B類の細片がある。



第13図 SD 120・125断面図 (1/40)

近代の遺構

柱列

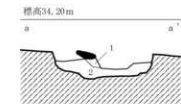
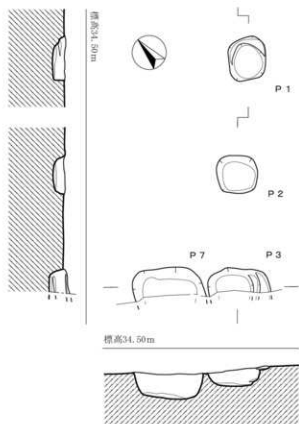
SA 50 (第4図)

南区中央部から西部で検出した、11基の柱穴からなる遺構である。柱穴は楕円形や隅丸方形、不定形の平面を有し、上面径0.38～0.58m、底面径0.19～0.52m、深さ0.08～0.15mを測る。P1とP11の距離は9.1m柱穴間の距離は、P1-P2間とP10-P11間が0.8m、P2-P3間が1.1mを測るほかは、0.9mを測る。計画方位は $N-60^{\circ}-W$ である。埋土は、黄色土ブロックを含む灰色土が占める。遺物はいずれも細片で、古代の土師器や須恵器、近世以降の染付や陶器、鉄製の釘や金具、炭化材、スラグ、ガラスの破片が出土した。

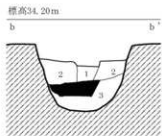
掘立柱建物跡

SB 1 (第14～15図、図版3～4)

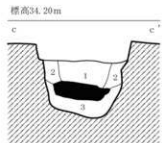
調査区東部で検出した遺構である。検出したのは南区・北区ともに南北方向の2間分で、主柱の



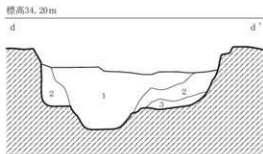
P4
1. 灰オリーブ色土 (暗褐色土ブロックを含む)
2. オリーブ色風土 (黄色土を含む)



P5
1. オリーブ灰色土 (締まり弱い) 柱痕跡
2. 灰オリーブ色土 (黄色土ブロックを含む, 締まり普通)
3. 暗褐色土 (黄色土ブロックを含む, 締まり弱い)



P6
1. オリーブ灰色土 (締まり弱い) 柱痕跡
2. 暗褐色土 (黄色土ブロックを含む, 締まり弱い)
3. オリーブ灰色土+黄色土



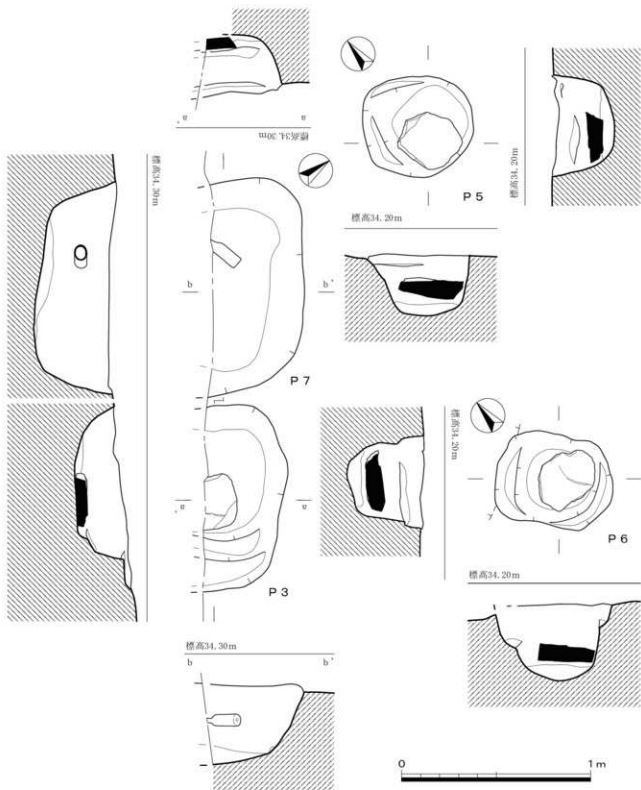
P8
1. 暗褐色土 (暗褐色土と黄色土, 炭粒を含む) 礎石抜取痕跡
2. 暗褐色土 (黄色土ブロックを含む)
3. 灰オリーブ色土 (黄色土を含む)



第14図 SB1実測図・土層図 (1/60, 1/20)

III. 調査の記録

柱穴6基（P1～6）と控え柱の柱穴2基（P7～8）が並び、南北端と中央部は調査区外に及ぶ。主柱の柱穴は歪な円形か隅丸方形の平面を有し、上面径0.34～0.63 m、底面径0.09～0.54 m、深さ0.08～0.34 mを測る。P3とP5～6は地下式礎石を有し、柱穴の底面に段が見られ、比較的深



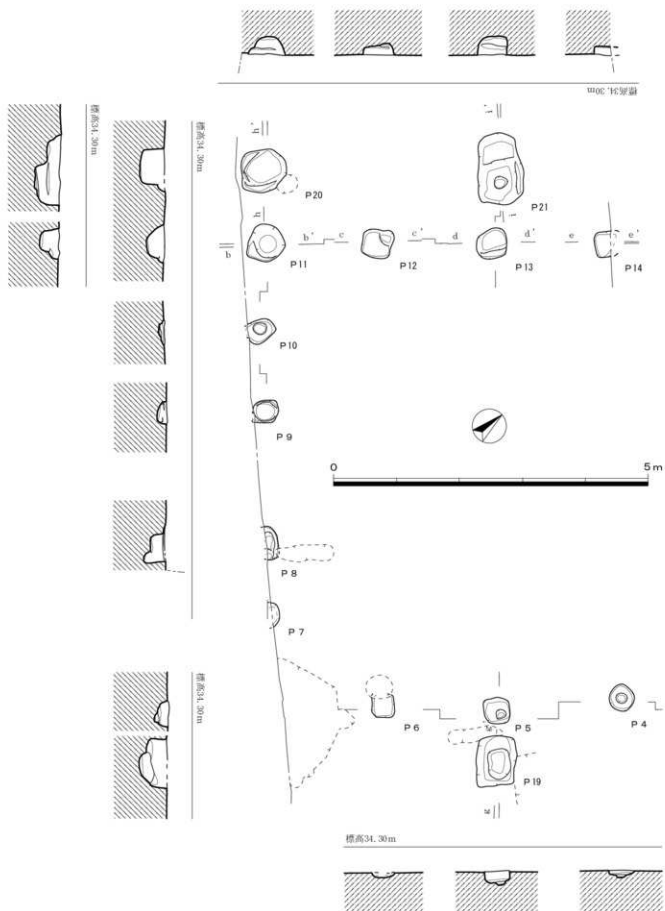
第15図 SB1P3・5～7実測図 (1/20)

い傾向にある。最北端のP1と最南端のP6の距離は25.4mを測り、柱間の間隔は、P3-P4間が18.1m、P5-P6間が2.0mを測るほかは、1.8mで収まる。P3とP5~6は地下式礎石を有し、比較的深い傾向にある。埋土は、P1が礫や炭粒を含む灰黄褐色土、P2が黄色土ブロックを含む縮まりが普通の灰色土、P3が褐色土を含む灰色土であるほかは第14図のとおりで、灰オリーブ土と暗褐色土が主体である。P5~6では柱痕跡とみられる縮まりの弱いオリーブ灰色土の層を確認した。控え柱の柱穴は隅丸方形の平面を有し、全形を確認したP8の上面径0.78~0.90m、底面径0.76~1.09mを測り、深さはP7が0.42m、P8が0.48mを測る。主柱の柱穴との間隔は、P3-P7間が1.0m、P5-P8間が0.7mを測る。埋土は、P7が褐色土ブロックを含む灰色土で、P8は第14図のとおりである。P8では礎石採取痕跡とみられる灰褐色土の層を確認した。出土遺物は、古代の土師器や黒色土器B類をはじめ、鉢などの中世須恵器、近世以降の瓦器や陶磁器、チャートの破片や焼石、焼成粘土塊、板ガラスやビール瓶などのガラス製品、釘や王冠栓といった鉄製品、滑石を含む縄文土器の細片がある。北区のP1~3・7と南区のP4~6・8は離れているが、P1~3とP4~6は互いの延長上に位置し、計画方位N-41°-Eで同一である点、柱穴の法量や埋土、出土遺物などの特徴が類似する点から、同一の遺構と判断した。

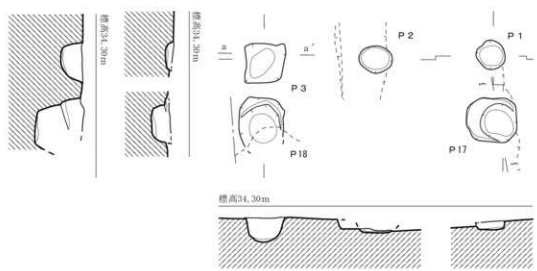
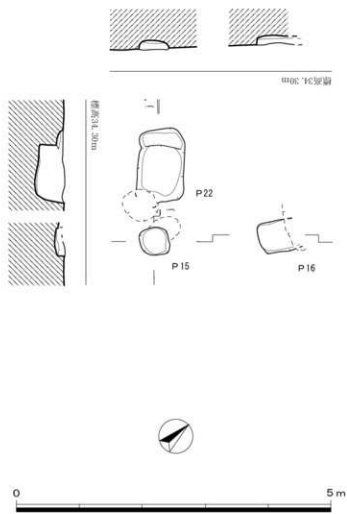
SB2 (第16~19図、図版4~5)

調査区中央部で検出した遺構である。検出したのは、南区が南北2間・東西5分で、北区が南北2間分である。主柱の柱穴(P1~16)がコの字状に配置され、控え柱の柱穴(P17~22)が付随する。主柱の柱穴は円形や隅丸方形、不定形と平面形は定まらず、上面径0.34~0.63m、底面径0.09~0.54m、深さ0.09~0.34mを測る。柱穴は削平が著しく、深さが10cmにも満たない柱穴もある。それを反映してか、地下式礎石は確認していない。最北端のP1と最南端のP7~11の距離は27.3mを測り、西辺と東辺の柱間の間隔は、P4-P5・P15-P16間が1.9m、P12-P13間が1.7mを測るほかは、1.8mで収まる。南辺の柱穴は、P7-P8間が1.2m、P8-P9間が2.4m、P9-P10・P10-P11間が1.3mを測る。埋土は、P5・9が黄色土ブロックや鉄分を含む灰オリーブ土、P16が黄色土ブロックや礫を含む灰色土で、P3・11~14は第18図のとおりである。P3・12~13で柱痕跡、P11で礎石採取痕跡とみられる土層を確認した。控え柱の柱穴は、隅丸方形か卵形に近い平面を呈し、上面径0.68~1.14m、底面径0.16~0.81m、深さ0.34~0.80mを測る。P17・22で地下式礎石を検出したほか、P18・20からは地下式礎石だったとみられる片岩が出土した。主柱の柱穴との間隔は、P1-P17間とP3-P18間が1.1m、P5-P19間が0.7m、P11-P20間が1.0m、P13-P21間とP15-P22間が1.2mを測る。埋土は、P18が縮まり普通の灰色土で占められ、P17・19~22は第18図のとおりである。P17で柱採取痕跡、P19で礎石採取痕跡、P20・22で柱痕跡とみられる土層を確認した。遺物は、古代の土師器や黒色土器A類をはじめ、古瓦の細片、土鍋などの中世の土師器、玉縁の白磁碗といった貿易陶磁器、近世以降の陶磁器、煉瓦の破片、釘や王冠栓などの鉄製品、石炭殻が出土した。北区のP1~3・15~18・22と南区のP4~14・19~21は離れているが、P1~3とP4~6・P11~14とP

III. 調査の記録

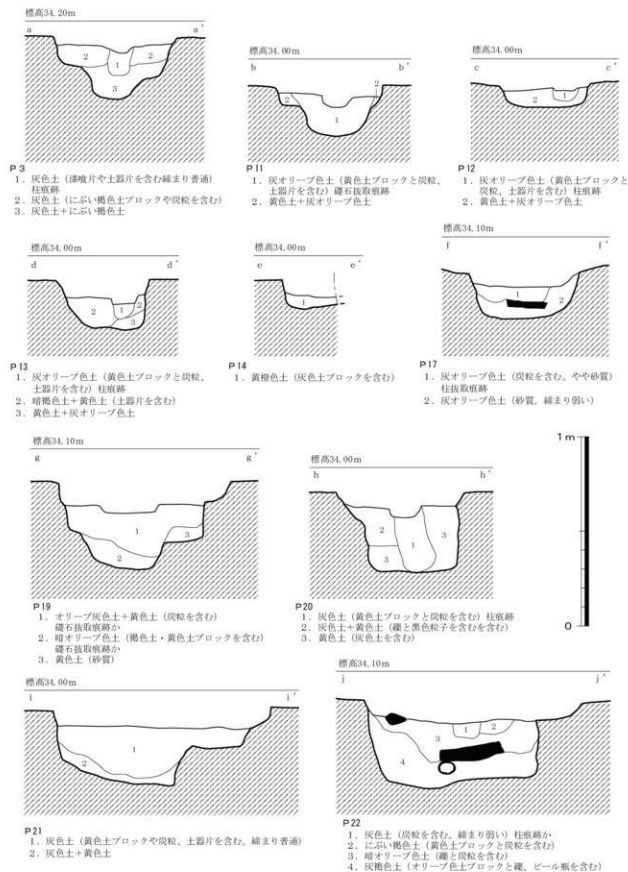


第 16 図 SB 2 南部実測図 (1/60)

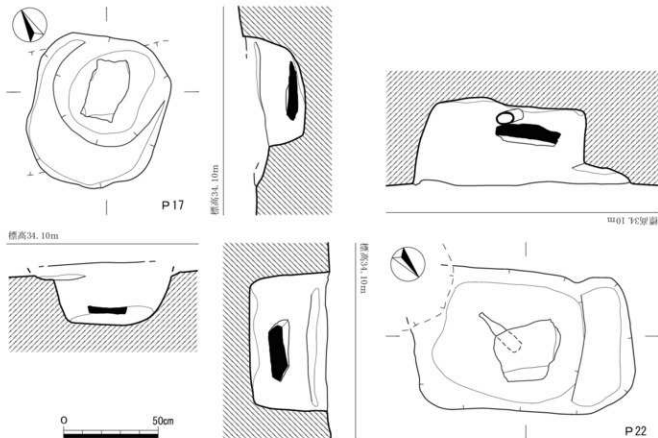


第17圖 SB2北部実測図 (1/60)

III. 調査の記録



第 18 図 SB 2 P 3・11～14・17・19～22 土層図 (1/20)



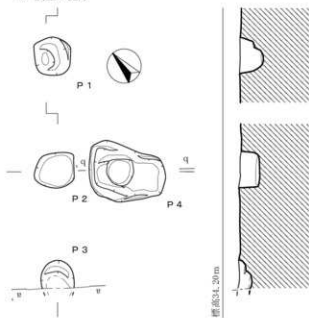
第19図 SB2P17・22実測図(1/20)

15～16は互いの延長上に位置し、計画方位 $N-41^{\circ}-E$ で同一である点、柱穴の法量や埋土、出土遺物などの特徴が類似する点から、同一の遺構と判断した。

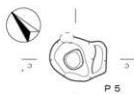
SB3 (第20～21図、図版5)

調査区西部で検出した遺構で、検出したのは北区が南北方向の2間分、南区が控え柱の柱穴2基(P5～6)である。支柱の柱穴3基(P1～3)と控え柱の柱穴3基(P4～6)が並び、南北端と中央部は調査区外に及ぶ。最北端のP1と最南端のP6の距離は、25.5mを測る。支柱の柱穴は歪な円形の平面を有し、上面径0.11～0.64m、底面径0.38～0.54m、深さ約0.25～0.39mを測る。いずれも地下式礎石を有し、P1・3は柱穴の底面に段が見られる。P1とP3の距離は3.6mを測り、柱間の間隔は1.8mで収まる。埋土は、P1が黄色土ブロックを含む灰色土、P2が褐色土ブロックを含む灰色土で、P3は第20図のとおり灰オリーブ色土とオリーブ色土が占める。P3の灰オリーブ色土層は柱抜取痕跡の可能性もある。控え柱の柱穴は平面形が定まらず、上面径0.54～1.24m、底面径0.23～0.50m、深さ0.14～0.62mを測る。P6は比較的浅く底面に段を有しないことから、著しく削平されていると考えられる。柱穴の間隔は、P4～P5間が20m、P5～P6間が3.7mを測る。支柱の柱穴との間隔は、P2～P4間が1.0mを測る。埋土は、P6が黄色土ブロックを含む灰オリーブ色土で、P4～5は第20図のとおり褐色土と灰色土で占められる。P4では、柱抜取痕跡とみられる層を確認した。出土遺物は、古代の土師器や黒色土器A類、須恵器の細片に

III. 調査の記録



標高34.20m



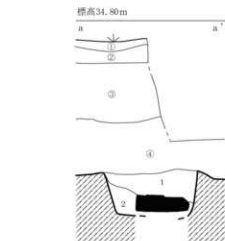
標高34.20m



標高34.20m



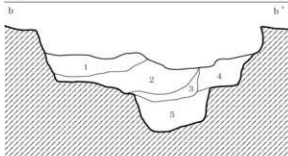
0 2m



P3

- ① 灰白色真砂土
- ② 黒褐色土 (瓦礫を含む)
- ③ 暗褐色土 (瓦礫を含む)
- ④ 灰オリーブ色土 (土器片と礫を含む、やや砂質)
1. 灰オリーブ色土 (黄色土ブロックを含む)
2. オリーブ色土 (黄色土ブロックを含む)

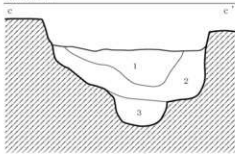
標高34.10m



P4

1. 暗褐色土 (灰色土・黄色土ブロックを含む) 柱抜取痕跡
2. 灰色土 (灰褐色土と礫を含む) 柱抜取痕跡
3. 灰色土+暗褐色土 柱抜取痕跡
4. 暗褐色土 (黄色土ブロックと土器片を含む)
5. 灰オリーブ色土 (土器片を含む) 柱痕跡か

標高33.90m

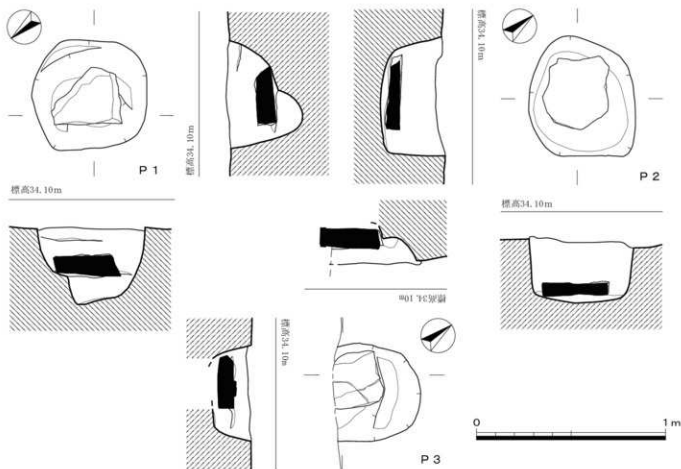


P5

1. 暗褐色土 (黄色土ブロックと瓦礫を含む)
2. 灰色土 (黄色土・暗褐色土ブロックを含む)
3. 灰オリーブ色土 (土器片を含む) 柱痕跡か

0 50cm

第20図 SB3実測図・土層図 (1/60, 1/20)



第21図 SB3 P1～3実測図 (1/20)

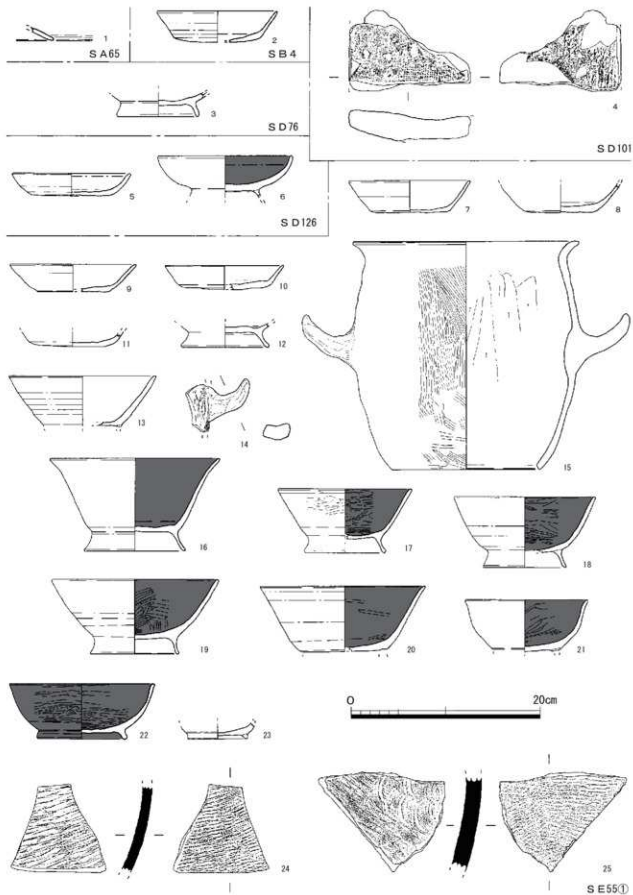
加え、植木鉢といった近代の土師器や陶磁器、煉瓦、板ガラスの細片、鉄釘や鉄滓などの鉄製品が挙げられる。北区のP1～4と南区のP5～6が離れているが、P5～6の延長上にP4が位置し、P1～3に平行する点、いずれも計画方位 $N-41^{\circ}-E$ で同一である点、柱穴の法量や埋土、出土遺物などの特徴が類似する点から、同一の遺構と判断した。

4. 出土遺物 (第22～25図、第1～3表、図版6～10)

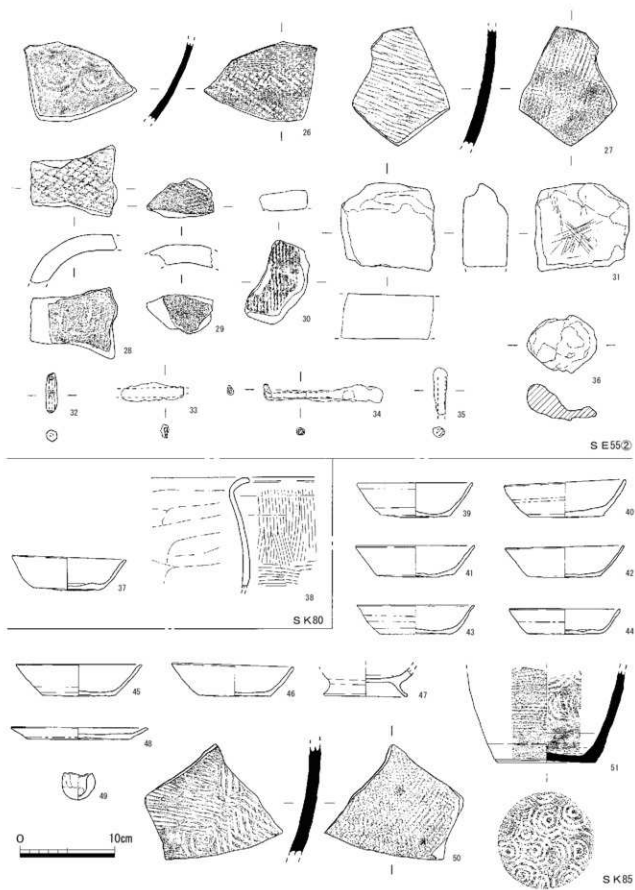
遺物の総量は、バンコンテナ4箱である。出土遺物の大半を、古代の土師器や黒色土器、須恵器が占める。土師器は坏や皿、埴とその細片、甕が多数を占める。

坏と皿、埴はほとんどがへら切り底で、SD 120・125出土品の一部が糸切り底だった。須恵器の大半は甕の胴部片で、ピットから坏の口縁部が少量出土した。このほか、斜格子文叩きの丸瓦や縄目文叩きの平瓦といった古瓦や、灰釉陶器の壺、越州窯系青磁碗や白磁碗といった貿易陶磁器、近代の陶磁器の細片、土錘や煉瓦といった土製品、釘や王冠栓、鉄滓などの鉄製品、ビール瓶や板ガラスなどのガラス製品、焼粘土塊、石炭殻が出土した。さらに、ピットや後世の遺構への混入だが、縄文土器や打製石鏃、敲石や磨石、黒曜石・安山岩の剥片も出土した。個別の法量や色調、調整などの詳細については、遺物観察表を参照頂きたい。

III. 調査の記録

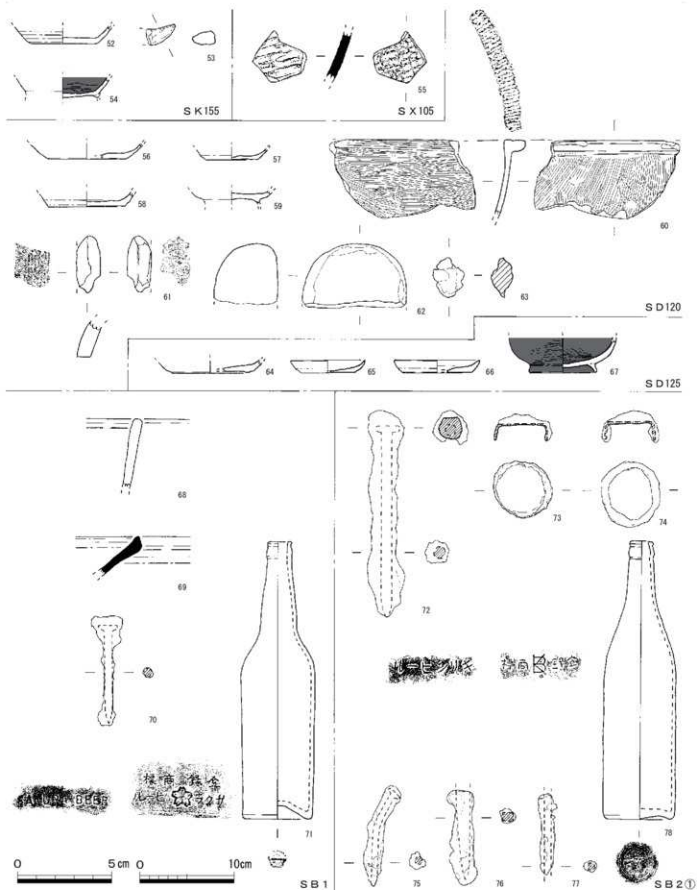


第 22 図 出土遺物実測図 1 (1/4)

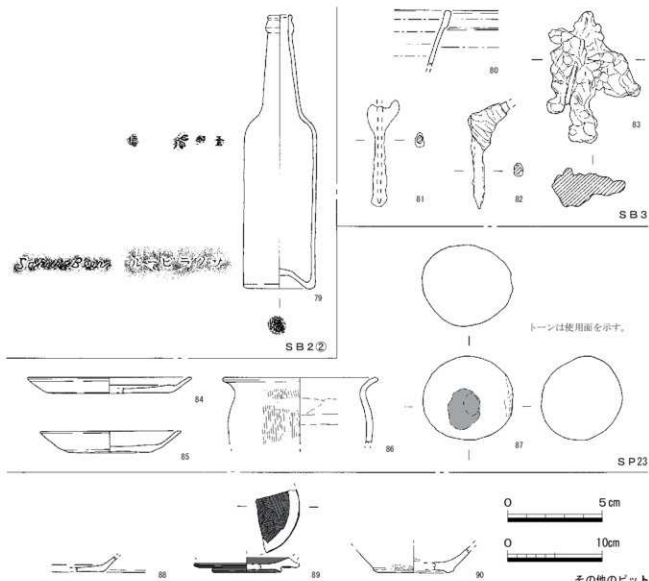


第23図 出土遺物実測図2 (1/4)

III. 調査の記録



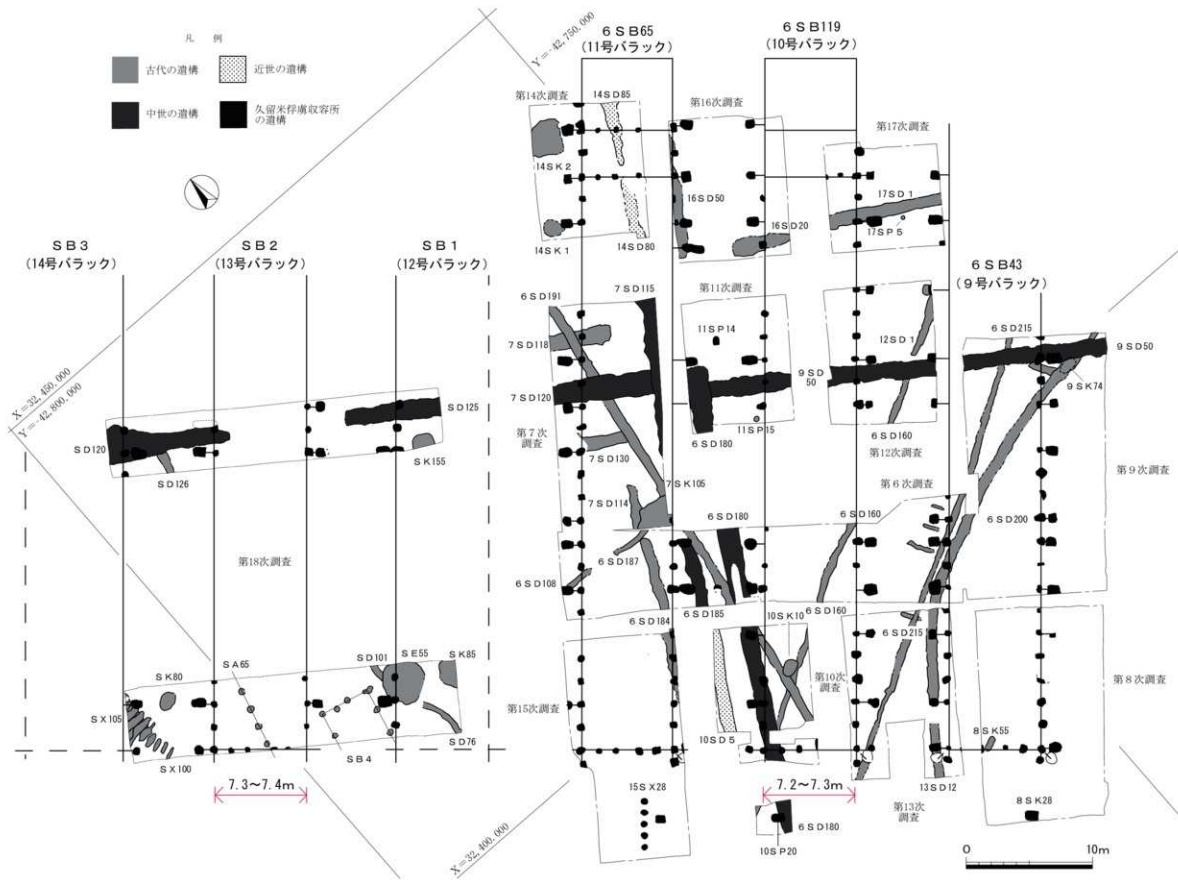
第 24 圖 出土遺物実測図 3 (1/2, 1/4)



第25図 出土遺物実測図4 (1/2, 1/4)

第1表 出土遺物観察表1

| 遺物 No. | 出土 層位 | 材質 | 部 種 | 測 量 (cm) | | | 色 調 | | 表面 (形状) | | | 胎 土 取 量 | 備 考 | 写真No. |
|-----------|-------------|------------|-----|------------|-----------|------------|----------------|--------------------|------------|---------------|-----------------------|-----------------|-----------------------------|------------------|
| | | | | 口徑 (長さ) | 底径 (幅) | 高さ (厚さ) | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | 底底・取捨 | | | |
| 1 観1層 | S465 F70 | 土師器 | 杯蓋 | — | — | 0.0 | にじみ-褐色 | 同輪ナデ | 同輪ナデ | — | 焼良 (赤色粘土) | | 201719 000010 | |
| 2 観1層 | SB4 F70 | 土師器 | 杯 | (12.7) | (9.2) | 3.3 | 褐色~ にじみ-褐色 | にじみ-赤褐色 にじみ-赤褐色 | 同輪ナデ | 同輪ナデ | へつり 削 | 焼良 (赤色粘土) | | 201719 000010 |
| 3 観1層 | SD56 | 土師器 | 埴 | — | 8.8 | (2.5) | 褐色~にじ み-黄褐色 | にじみ- 黒褐色 | 同輪ナデ | 同輪ナデ ナデ | へつり 削 (大割の褐色粘土) | 焼良 (赤色粘土) | 内面・底台内面に門歯痕あり。 底台内に土痕あり。 | 201719 000010 |
| 4 観1層 | SD181 | 古瓦 | 平瓦 | (8.6) | (12.9) | 0.0 | 褐色 | 同輪ナデ | 同輪ナデ ナデ | 削 削 | — | 焼良 (砂粘) | 側面にへつり。 | 201719 000010 |
| 5 観1層 | SD126 | 土師器 | 杯 | (12.6) | (8.5) | 2.5 | にじみ-黄褐色~ 褐色 | 同輪ナデ へつりナデ | 同輪ナデ ナデ | へつり 削 削 | — | 焼良 (赤色粘土) | 内外面に門歯痕あり。 | 201719 000010 |
| 6 観1層 | SD126 | 褐色土師 A胎 | 埴 | (14.3) | — | (4.0) | 黒色~ にじみ-黒褐色 | 黒褐色 | 摩耗 | 同輪ナデ 摩耗 | 摩耗 | — | 内外面摩耗。 | 201719 000010 |
| 7 観1層 | SE55 | 土師器 | 杯 | (12.9) | 8.0 | 3.3~3.6 | にじみ-褐色 | にじみ-褐色 ~褐色 | 同輪ナデ | 同輪ナデ | へつり 削 削 削 | 焼良 (少量の赤色粘土) | 外面に縁部に黒痕あり。 | 201719 000010 |
| 8 観1層 | SE55 | 土師器 | 杯 | — | (7.8) | (3.0) | にじみ-黄褐色 ~褐色 | 褐色 | 同輪ナデ ナデ | 同輪ナデ ナデ | へつり 削 | 焼良 (赤色粘土) | 外面に縁部に黒痕あり。 内外面磨耗が強い。 | 201719 000010 |
| 9 観1層 | SE55 | 土師器 | 杯 | (13.4) | (7.5) | 2.95~3.2 | 褐色~黒褐色 | 褐色 | 同輪ナデ | 同輪ナデ ナデ | へつり 削 | 焼良 (赤色粘土) | 口縁部に黒痕付き。 内外面磨耗。 | 201719 000010 |
| 10 観1層 | SE55 | 土師器 | 埴 | (12.6) | (7.6) | 2.6 | にじみ-褐色 ~赤色 | にじみ-褐色 | 同輪ナデ | 同輪ナデ | へつり 削 | 焼良 (赤色粘土・黄砂) | 外面磨耗が強い。黒痕あり。 内面に土痕あり。 | 201719 000010 |



第26図 白川遺跡第6～18次調査主要遺構配置図 (1/300)

III. 調査の記録

第2表 出土遺物観察表2

| 遺物 No. | 出土 遺物 | 材質 | 形 種 | 測定 (No) | | | 色 調 | | 測定 (No) | | | 特 記 | 備 考 | 写真等 | |
|-----------|----------|-----------------|-------------|------------|------------|--------------|-----------------|---------------|----------------|--------------|-------------|-------------------------|---------------------------|------------------|----------------|
| | | | | 口径 (長さ) | 直径 (長さ) | 高さ (長さ) | 外面 (特徴) | 内面 (形状) | 外面 | 内面 | 底面・断面 | | | | |
| 11 | 3033 | 土師器 | 杯 | — | 9.2 | (1.6) | にじみ褐色 | 褐色 | | | | 施土 [褐色(赤色皮子)] | 内面に黒線がましい。 | 2017B 00069 | |
| 12 | 3035 | 土師器 | 瓶 | — | (9.6) | (2.6) | にじみ黄褐色 | 褐色 | 回転ナズ | 回転ナズ | へつり ナズ | 施土 [赤色皮子] | — | 2017B 00047 | |
| 13 | 3035 | 土師器 | 瓶 | — | (9.6) | (2.6) | にじみ黄褐色 | 褐色 | 回転ナズ | 回転ナズ | へつり ナズ | 施土 [赤色皮子] | — | 2017B 00047 | |
| 14 | 3035 | 土師器 | 瓶 | (15.6) | — | (5.3) | 褐色～黄色 | 褐色～ にじみ褐色 | 回転ナズ | 回転ナズ | — | 施土 [赤色皮子] | 底に文様、内外面磨光。 外面に黒線がましい。 | 2017B 00043 | |
| 16 | 3033 | 土師器 | 肥子 | — | — | (5.2) | 褐色 | 黒毛目 ナズ・オヤニ | | | — | 施土 [赤色皮子] | — | 2017B 00066 | |
| 15 | 3033 | 土師器 | 瓶 | (24.0) | (15.6) | 24.33 | 明赤褐色 ～褐色 | 明赤褐色 | 黒毛目・ナズ 回転ナズ | 回転ナズ | ナズ | 施土 [赤色皮子(黄皮)] | 外面に黒線あり。 | 2017B 00066 | |
| 16 | 3033 | 褐色土部 入瓶 | 瓶 | (18.0) | (18.0) | 9.8～ 9.83 | 褐色～黄色 | 褐色 | 回転ナズ 回転ナズ | 回転ナズ 回転ナズ | へつり ナズ | 施土 [赤色皮子] | 内面に黒線がましい。 | 2017B 00030 | |
| 17 | 3033 | 褐色土部 入瓶 | 瓶 | (14.0) | (8.2) | 6.8 | にじみ褐色 ～褐色 | 褐色 | 回転ナズ | 回転ナズ | 3号 | へつり | 施土(黄皮) | — | 2017B 00050 |
| 18 | 3033 | 褐色土部 入瓶 | 瓶 | (13.0) | (8.0) | 2.5 | 褐色 | 褐色 | 回転ナズ | 回転ナズ | 3号 | へつり 回転ナズ | 施土 [赤色皮子] | 外面に門歯状あり。 | 2017B 00052 |
| 19 | 3033 | 褐色土部 入瓶 | 瓶 | (17.2) | 9.4 | 2.95 | にじみ 黄褐色 | 褐色 | 回転ナズ 回転ナズ | 回転ナズ | 5号 | へつり | 施土 [赤色皮子] | 外面黒線がましい。 | 2017B 00050 |
| 20 | 3033 | 褐色土部 入瓶 | 瓶 | (11.3) | — | (7.0) | 褐色 | 褐色 | 回転ナズ | 回転ナズ | 2号・ 3号 | へつり | 施土 [赤色皮子(黄皮)] | 底面磨光。 | 2017B 00053 |
| 21 | 3033 | 褐色土部 入瓶 | 瓶 | (13.0) | — | (5.6) | 褐色～黄色 | 褐色 | 回転ナズ | 回転ナズ | 5号 | へつり 回転ナズ | 施土 [赤色皮子] | 底面磨光、外面黒線がましい。 | 2017B 00053 |
| 22 | 3033 | 褐色土部 短瓶 | 瓶 | (13.5) | 9.6 | 3.8～4.6 | 褐色 | 褐色 | 回転ナズ | 回転ナズ | 2号 ナズ | へつり 板状底面 | 施土(黄皮) | — | 2017B 00042 |
| 23 | 3033 | 灰褐色～灰 白色(輪紋) | 瓶 | — | (8.4) | (3.2) | 灰白色～灰 白色(輪紋) | 灰褐色 (胎土) | 回転ナズ | 回転ナズ | 回転ナズ | — | 施土 (黄皮) | — | 2017B 00054 |
| 24 | 3033 | 灰褐色 | 壺 | — | — | (9.4) | 褐色 | 褐色 | 平行文 織り | 平行文 織り | — | — | 施土 (黄皮) | 底面磨光。 | 2017B 00057 |
| 25 | 3033 | 褐色器 | 壺 | — | — | (10.6) | 明赤褐色 | 灰褐色 | 平行文 織り | 平行文 織り | 5号・ 6号 | — | 施土 (黄皮) | 内面に黒・黄線あり。 | 2017B 00052 |
| 26 | 3033 | 褐色器 | 壺 | — | — | (8.4) | 灰黄褐色 | 灰褐色 | 平行文 織り | 平行文 織り | 6号・ 7号 | — | 施土 [黄皮(赤色皮子)] | — | 2017B 00053 |
| 27 | 3033 | 褐色器 | 壺 | — | — | (12.4) | 灰赤色 | 灰赤色 ～暗赤褐色 | 格子文 織り | 格子文 織り | 平行文 織り | — | 施土 [少量の赤色皮子 (少量)] | 内面・外面磨光(底のみ)。 | 2017B 00046 |
| 28 | 3033 | 古瓦 | 丸瓦 | (7.6) | (9.2) | (5.3) | 黄褐色 | にじみ褐色 | 格子文 織り | 格子文 織り | 5号 | — | 施土(黄皮) | 内外面磨光。 | 2017B 00044 |
| 29 | 3033 | 古瓦 | 丸瓦 | (4.2) | (7.1) | (1.43) | 灰黄褐色 | 黄褐色 | 格子文 織り | 格子文 織り | 5号 | — | 施土(黄皮) | 内外面磨光。 外面に付着。 | 2017B 00042 |
| 30 | 3033 | 古瓦 | 平瓦 | (8.3) | (6.8) | (2.1) | 黄褐色 | 黄褐色 | 格子文 織り | 格子文 織り | 5号 | — | 施土 [赤色皮子] | 磨光がましい。 | 2017B 00055 |
| 31 | 3033 | 赤製品 | 磁石 | (10.0) | (9.2) | 6.8 | 灰黄褐色 | 灰黄褐色 | 格子文 織り | 格子文 織り | 6号 | — | 77g | 瓦割形。 | 2017B 00054 |
| 32 | 3033 | 土製品 | 土鏝 | 4.3 | 1.23 | 1.2 | 褐色～にじ み黄褐色 | 暗灰黄色 | 格子文 織り | 格子文 織り | 格子文 織り | — | 施土(黄皮) 54.3g | 外面に黒・黄皮あり。 | 2017B 00056 |
| 33 | 3033 | 赤製品 | 刀子 | (6.4) | 2.1 | 0.9 | — | — | — | — | — | — | (13.33)g | — | 2017B 00052 |
| 34 | 3033 | 赤製品 | 鍔か | 12.7 | 1.9 | 0.75 | — | — | — | — | — | — | 37.2g | — | 2017B 00058 |
| 35 | 3033 | 赤製品 | 形か | (5.0) | 1.6 | 1.1 | — | — | — | — | — | — | (11.9)g | — | 2017B 00053 |
| 36 | 3033 | 赤製品 | 形か | 7.4 | 6.33 | 3.9 | — | — | — | — | — | — | 59.0g | — | 2017B 00051 |
| 37 | 3033 | 土師器 | 杯 | 11.2～12.2 | 7.1 | 3.2～3.8 | 褐色～黄褐色 | 褐色 | 回転ナズ | 回転ナズ | へつり 板状底面 | 施土 [少量の赤色皮子 (少量)] | — | 2017B 00056 | |
| 38 | 3033 | 土師器 | 壺 | — | — | (11.2) | 褐色～黄褐色 | 褐色 | 黒毛目 回転ナズ | 黒毛目 回転ナズ | — | 砂状・ 色戻り | 内外面磨光。 | 2017B 00057 | |
| 39 | 3045 | 土師器 | 杯 | (12.4) | 7.5～7.8 | 5.7 | 褐色 | 褐色 | 回転ナズ | 回転ナズ | へつり | 施土(黄皮) | 内面に門歯状あり。 | 2017B 00060 | |
| 40 | 3045 | 土師器 | 杯 | 15.8 | 8.0 | 3.3～4.0 | 褐色 | 褐色 | 回転ナズ | 回転ナズ | へつり 板状底面 | 施土(黄皮・ 赤色皮子) | 内面に門歯状あり。 | 2017B 00059 | |
| 41 | 3045 | 土師器 | 杯 | (12.2) | 8.1 | 3.4 | 褐色～ 灰黄褐色 | 褐色～ にじみ褐色 | 回転ナズ | 回転ナズ | へつり ナズ | 施土(黄皮) | 内面に門歯状あり。 | 2017B 00061 | |
| 42 | 3045 | 土師器 | 杯 | 12.4～12.6 | 7.6～7.8 | 3.1～3.5 | 褐色 | 褐色 | 回転ナズ | 回転ナズ | へつり | 施土(黄皮) | 内外面磨光。 外面に黒線あり。 | 2017B 00062 | |
| 43 | 3045 | 土師器 | 杯 | (12.5) | 7.5 | 3.1～3.5 | 黄褐色 ～灰褐色 | 黄褐色 ～灰褐色 | 回転ナズ | 回転ナズ | へつり | 施土 [少量の赤色皮子] | 内外面に門歯状、内面に土 具状あり。 | 2017B 00063 | |
| 44 | 3045 | 土師器 | 杯 | (11.8) | 8.2 | 2.7 | 褐色 | 黄褐色 ～黄褐色 | 回転ナズ | 回転ナズ | へつり | 施土 [赤色皮子] | 内面に門歯状、外面に黒線あり。 | 2017B 00065 | |
| 45 | 3045 | 土師器 | 杯 | (13.2) | (7.2) | 3.4～3.5 | 褐色 | 褐色 | 回転ナズ | 回転ナズ | へつり | 施土 | 内面に門歯状、外面に黒 線あり。 | 2017B 00064 | |
| 46 | 3045 | 土師器 | 杯 | 13.0 | 7.5 | 3.2～3.6 | 褐色 | 褐色 | 回転ナズ | 回転ナズ | へつり | 施土 | 内外面に門歯状あり。 | 2017B 00066 | |
| 47 | 3045 | 土師器 | 杯 | — | 8.8～9.8 | (3.1) | 黄褐色 ～褐色 | 黄褐色 | | | | 施土 [褐色(赤色皮子)] | — | 2017B 00067 | |
| 48 | 3045 | 土師器 | 壺 | (14.1) | 10.8 | 1.23 | 褐色～ にじみ褐色 | 褐色 | 回転ナズ | 回転ナズ | へつり | 施土 [赤色皮子] | 内面に門歯状あり。 | 2017B 00068 | |
| 49 | 3045 | 土師器 | モノチムア 土器 | 3.0 | 0.8 | 2.8 | にじみ褐色 | オヤニ | | | オヤニ ナズ | 施土(黄皮) | 最大径 3.6cm | 2017B 00069 | |
| 50 | 3045 | 褐色器 | 壺 | — | — | (12.2) | にじみ褐色 | 黒毛目・ 回転ナズ | 黒毛目 | 格子文 平行文 | — | — | 施土 [赤色皮子] | — | 2017B 00070 |

IV. 総 括

今回の調査では、古代と中世、近代の遺構を検出した。以下、遺構の変遷や性格について隣接する第6～17次調査の調査成果(注1)を交えながら、時代ごとに述べる。

1. 古代の遺構について

古代の遺構は、柱列1基、掘立柱建物1棟、溝3条、井戸1基、土坑3基、その他の遺構2基を検出した。

柱列SA 65は遺物に乏しいが、口縁部のかえしが退化した土師器坏蓋が出土したことから、8世紀後半以降の所産とみられる(注2)。掘立柱建物SB 4は、主軸が近似することからSA 65と同じ年代の可能性がある。SB 4の出土遺物にヘラ切り底で底部付近に面取りが無い土師器坏や、黒色土器A類の塊を含むことから、9世紀後半以降の所産が考えられる。これらの遺構は、国分寺・国分尼寺が機能していた8世紀後半～9世紀における、周辺の集落の様相を示すとみられる。

溝はSD 76・101・126の3条を検出したが、いずれの溝からも黒色土器A類の塊が出土した。さらに、SD 101・126では細片だが黒色土器B類が出土した。このことから、SD 76の年代は9世紀後半から10世紀前半、SD 101・126の年代は10世紀から11世紀初頭と想定される。

井戸SE 55は、黒色土器A類の塊が複数出土した一方で、黒色土器B類の塊も出土したことから、10世紀後半から11世紀初頭の年代が考えられる。出土した灰陶陶器は細片だが、内面が露胎で器壁の立ち上がり急であることから壺と判断でき、須恵質である点も注目できる。

3基の土坑SK 80・85・155のうち、注目できるのは多数の土師器坏が出土したSK 85である。低平な皿や須恵器の壺が伴うことから、その年代は9世紀前半に収まるとみられる。SK 155は黒色土器A・B類が共伴することから、10世紀から11世紀初頭の土坑と考えられる。

SX 100とSX 105は、主軸の違いから遺構番号を分けたが、一連の遺構である可能性が高い。久留米市内ではこうした遺構が複数検出されており、筑後国府跡(注3)やヘボノ木遺跡(注4)、念仏塚遺跡(注5)、汐入遺跡(注6)、古賀ノ上遺跡(注7)、船越高原A遺跡(注8)の検出例が挙げられる。このうち、鍛冶関連の遺構とされている念仏塚遺跡の例以外は、土器の細片や礫、川原石を含み、側溝や硬化面を伴うことから、道路遺構の修復に伴う波板状凹凸面(注9)と指摘されている。今回検出したSX 100・105は、埋土に礫や土器の細片を含む点、出土遺物は摩耗しているが被熱は見られない点、ピット間の心芯距離が約60cmで均一な点から、波板状凹凸面の特徴(注10)を有している。その年代は、SX 105から黒色土器B類の細片が出土したことから、10世紀以降の埋没が想定される。本調査地点の東側に目を向けると、第7・8～10・12次調査地点で道路跡とみられる二対の溝6SD 160・12SD 1と6SD 215が検出されている。後出する遺構から側溝の埋没年代は9世紀に収まるとみられるが、SX 100・105の存在は、側溝を有する道路と方位を別にする道路の存在を示唆する。もっとも、いずれの遺構も硬化面は削平されているため、出土遺物のみで年代を明らかにすることはできない。SX 100・105が伴う道路に至っては、方位や規模も不明である。

このほか、ピットからの出土遺物として、黒色土器B類の托土壇や越州窯系青磁碗が注目できる。後者は8世紀末から10世紀中頃の所産である大宰府I-1b類に分類でき、本調査地点に居住した階層を示唆する。

2. 中世の溝について

中世の溝はSD 120・125の2条を検出した。同じ軸上に位置し、同時期に存続した可能性が高い。SD 120・125ともに黒色土器の塊も出土するが、SD 120はへら切り底と糸切り底の土師器杯が共伴し、口縁断面がL字状の土師器土鍋が出土したことから、その年代(注11)は12世紀後半以降と考えられる。SD 125は、出土した糸切り底の土師器小皿や黒色土器B類塊、後出するSB 1に混入した須恵器鉢の年代から、12～13世紀に収まるとみられる。

SD 120・125の東方に目を向けると、同軸上に7SD 120が位置する。7SD 120は、6SD 180と共に13世紀の方形溝を構成すると考えられるが、SD 120・125を加えると、少なくとも南北約37m、東西約48mの規模を有する方形の区画溝に復元でき、SD 120・125間に土橋を有する方形館の存在が考えられる。

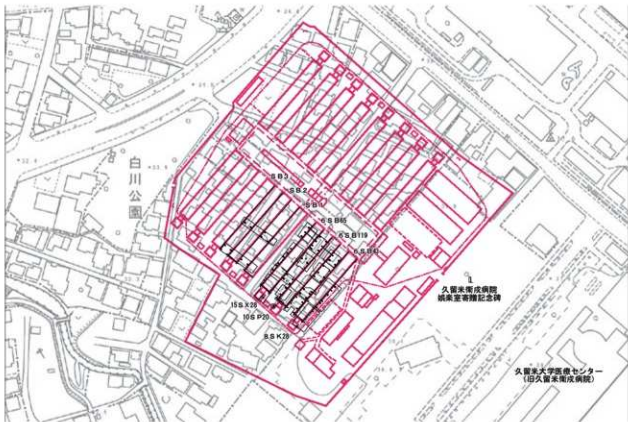
なお、SB 2 P 20からは貿易陶磁器の口縁部片が出土した。玉縁口縁を有する大宰府IV類の白磁碗で、11世紀後半から12世紀前半の所産とみられる。

3. 久留米俘虜收容所の遺構について

本調査地点に隣接する第6～17次調査地点では、久留米俘虜收容所の下士卒バラックが3棟(6SB 43・65・119)検出されており、今回の調査では下士卒バラックの続きを検出する事が想定された。調査の結果、下士卒バラックの続きと考えられる遺構として、SB 1～3を検出した。

これらの建物跡は、いずれも計画方位がN-41°-Eを測り、6SB 43・65・119にほぼ並走する。規模に目を向けると、桁行の残存長は27.3mを測り、柱穴の間隔は1.8mが大半を占める。SB 2の梁行は7.3～7.4mを測り、柱穴の間隔はP 8-P 9間が2.4mを測るほかは、1.2～1.3mで収まる。このように、桁行5間のうち中間部分の距離が左右2間よりも長い傾向は、6SB 43・65・119でも見られる。さらに第26図のとおり、SB 1～3の柱穴と6SB 43・65・119の柱穴は、同じ間隔で配置されている。柱穴の平面形・断面形や法量も類似し、地下式礎石や柱抜取痕跡の存在、黄色土ブロックを含む褐色や灰色・オリーブ色という埋土の特徴、そしてビール瓶や鉄釘、王冠栓といった出土遺物からも、SB 1～3が6SB 43・65・119と同時期の建物である可能性は非常に高い。これらの建物跡と俘虜收容所の平面図を、同縮尺の都市計画図に合成したのが第27図である。この合成図からも、SB 1～3が久留米俘虜收容所の下士卒バラック、その内の第12～14号バラックであることが分かる。

これまで、久留米俘虜收容所の下士卒バラックが規格性の高い建物であることは、写真や文献史料からも指摘されてきた(注12)。今回の調査では、6SB 43・65・119と同規模のSB 1～3を検出したことで、16棟ある下士卒バラックの内6棟が同じ規格で建てられていることを示し、下士卒バラックの規格性が高いことを、発掘調査からも実証することができた。



第 27 図 都市計画図と建物跡、久留米庁廃収容所の合成図 (1/2,500)

4. 下士卒バラック出土のビール瓶について

今回の調査では、合わせて3種類のビール瓶が出土した。このうち2種類がサクラビールの瓶(第24図71、第25図79)、1種類がキリンビールの瓶(第24図78)である。

サクラビールの瓶は、第7～8・11次調査でも出土した。いずれも肩が張った外形を有し、胴部径7.7～8.4 cm、高さ29～30 cmを測る。また、底部が上げ底で陽刻を有する点も共通する。これらのビール瓶は、陽刻の違いで3種類に分けられる。

第1類 — 肩部に「標商」「録登」と桜花の陽刻を、底部近くに「ルービラクサ SAKURABEER」の陽刻を施す。第7～8・11次調査で出土した、白川遺跡で最も完形品での出土例がある瓶である。なお、同型品は京限侍屋敷遺跡第20次調査でも出土した(注13)が、この瓶は底部にも桜花の陽刻があるため、さらに細分することができる。

第2類 — 肩部に「標商」「録登」と桜花の陽刻を、底部近くに「ルービラクサ」と筆記体で「SAKURABEER」の陽刻を施す。第6～17次調査では出土しておらず、今回が最初の出土例となる。

第3類 — 肩部の陽刻が無く、底部近くに2段組みで「標商 録登」と桜花、「ルービラクサ SAKURABEER」の陽刻を施す。今回の調査でも出土し、第7次調査で出土したほか、未掲載だが第8次調査でも遺構検出時に底部片が出土した。また、肩部に陽刻が無いことから、第13次調査で出土したビール瓶も第2類である可能性がある。

キンピールの瓶は、なで肩で上げ底はサクラビールの瓶に比べて浅い。肩部に「標商」と「録登」、キンピールのイニシャルであるKとBを組み合わせた記号、「キンピール」の陽刻を施す。

これらのビールは、捕虜たちが日頃から飲んでいたビールである可能性が高い。収容所内に設置された売店である酒保では、大正5年（1916）だけで9万円近くを売り上げており、久留米の経済に大きな影響を与えていた。ワルシャワ陥落（大正4年8月4日）やブカレスト陥落（大正5年12月6日）などの戦勝、皇帝ウィルヘルム2世の誕生日、クリスマスなどには大量のビールが消費されており、捕虜が撮影した写真にも、大量のビール瓶が積まれている様子が見られる（写真A～B）。過去の調査報告書では文献史料にサクラビールが登場すると述べた。加えて、捕虜たちが収容所で撮影した写真に目を向けると、酒保で捕虜と日本人がビールを飲んでいる写真（写真C～D）がある。写真Cでは、机の上になで肩に楕円形のラベルを貼ったキンピールの瓶が見える。また、写真Dでは中央の子どもや右端の日本人が平行四辺形のラベルを有する肩が張ったサクラビールの瓶を持っており、カウンター右側の奥の戸棚にも、サクラビールの瓶が見える。一方で、子どもの足元やカウンターの左端には、なで肩に楕円形のラベルを張ったキンピールの瓶が並んでいる。



写真A (C・F・クライケ資料)



写真B (E・クルーグ資料)



写真C (H・E・Oヴォルフ資料)



写真D (E・クルーグ資料)



写真E (E・クルーグ資料)

※いずれも久留米市教育委員会所蔵。

第28図 写真に見る久留米俘虜収容所のビール瓶

捕虜たちは、収容所の中だけでなく外出先でもビールを飲んでた。写真Eでは、河畔で捕虜がビールを飲んでいるが、手にしているのは肩が張ったサクラビールの瓶である。

これらの写真資料からも、これまでの発掘調査で出土したサクラビールとキリンビールの瓶は、捕虜が飲んで廃棄したものである可能性が高い。ただし、キリンビールの瓶は礎石の下から出土しており、収容所の改修や廃絶の際に廃棄された可能性が残るが、俘虜収容所の前身である久留米衛戍病院の新病舎が立てられた際、既に埋没していた可能性もある。

【注】

- (1) 久留米市教育委員会『白川遺跡 一第6次発掘調査報告一』久留米市文化財調査報告書第377集 平成29年
久留米市教育委員会『平成28年度久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第380集 平成29年
久留米市教育委員会『平成29年度久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第400集 平成30年
久留米市教育委員会『白川遺跡(久留米俘虜収容所跡) 一第11～17次発掘調査報告一』久留米市文化財調査報告書第403集 平成30年
- (2) 土師器や黒色土器の年代は、以下の文献を参考にした。
松村一良『筑後国府跡の調査』(財)古代学協会『古代文化』第35巻第7号 昭和58年
山本信夫『大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器 一10～12世紀の資料(1)本文編一』日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究』IV 昭和63年
山本信夫『北部九州の土器』大川清・鈴木公雄・工業善通・編『日本土器事典』雄山閣出版 平成8年
横田賢次郎『大宰府の土器』大川清・鈴木公雄・工業善通・編『日本土器事典』雄山閣出版 平成8年
白木守・近藤康治『筑後における初期貿易陶磁の様相』日本貿易陶磁研究会『貿易陶磁研究』第20号 平成12年
- (3) 久留米市教育委員会『筑後国府跡 昭和63年度発掘調査概要』久留米市文化財調査報告書第59集 平成元年
久留米市教育委員会『筑後国府跡 平成4年度発掘調査概要』久留米市文化財調査報告書第81集 平成3年
久留米市教育委員会『筑後国府跡 第146次調査発掘調査概要』久留米市文化財調査報告書第131集 平成7年
久留米市教育委員会『筑後国府跡・国分寺跡 一平成16年度発掘調査報告・概要報告一』久留米市文化財調査報告書第210集 平成17年
久留米市教育委員会『筑後国府跡 一第219次発掘調査報告一』久留米市文化財調査報告書第259集 平成19年
神保公久『筑後国府の道路遺構』『九州と東アジアの考古学 一九九〇年九州大学考古学研究会50周年記念論文集一』平成20年
久留米市教育委員会『筑後国府跡 一平成25年度発掘調査報告一』久留米市文化財調査報告書第347集 平成26年
- (4) 久留米市教育委員会『東部地区埋蔵文化財調査報告書第9集』久留米市文化財調査報告書第61集 平成2年
久留米市教育委員会『久留米市埋蔵文化財調査集報Ⅲ』久留米市文化財調査報告書第167集 平成12年
- (5) 久留米市教育委員会『安武地区遺跡群Ⅵ』久留米市文化財調査報告書第72集 平成2年
- (6) 久留米市教育委員会『汐入遺跡 一第2分冊 第3次発掘調査編一』久留米市文化財調査報告書第393集 平成30年
- (7) 北野町教育委員会『古賀ノ上遺跡4』北野町文化財調査報告書第20集 平成16年
- (8) 福岡県教育委員会『船越高原A遺跡Ⅲ』一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第16集 平成14年
- (9) 波板状凹凸面の名称は、波板状圧痕や波板状痕跡、波板状遺構などがある。今回は、『発掘調査のてびき 各種遺跡調査編』(文化庁文化財部記念刊物、平成25年)で用いられている波板状凹凸面を用いた。
- (10) 東和幸『波板状凹凸面歩行痕説再論』鹿児島県立埋蔵文化財センター『研究紀要 縄文の森から』創刊号 平成15年
小栗野亮『古代道における路地施工の複合性 一道路に残された遺構の分別理解一』九州考古学会『九州考古学』第78号 平成15年
- (11) 土師器などの年代は、注2に挙げた文献に加えて、以下の文献を参考にした。
山本信夫・山村信榮『中世食器の地域性 10～九州・南西諸島』国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告』第212集 平成9年
- (12) 久留米市教育委員会『久留米俘虜収容所 1914～1920』久留米市文化財調査報告書第153集 平成11年
久留米市教育委員会『ドイツ軍兵士と久留米 一久留米俘虜収容所Ⅱ一』久留米市文化財調査報告書第195集 平成15年
久留米市教育委員会『ドイツ兵俘虜とスポーツ 一久留米俘虜収容所Ⅲ一』久留米市文化財調査報告書第213集 平成17年
久留米市教育委員会『ドイツ兵俘虜と収容生活 一久留米俘虜収容所Ⅳ一』久留米市文化財調査報告書第251集 平成19年
久留米市教育委員会『ドイツ兵俘虜と家族 一久留米俘虜収容所Ⅴ一』久留米市文化財調査報告書第306集 平成21年
- (13) 久留米市教育委員会『京傳侍屋敷遺跡 一第20・22次発掘調査報告一』久留米市文化財調査報告書第323集 平成25年

写真図版

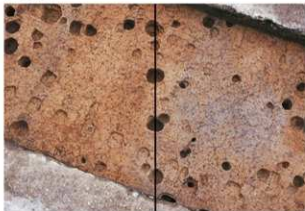


(1) 北区全景 (南西上空から)

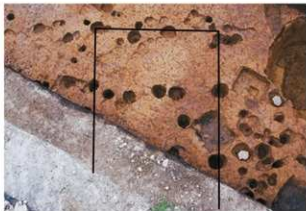


(2) 南区全景 (北東上空から)

図版 2



(1) SA 65 完掘状況 (北上空から)



(2) SB 4 完掘状況 (南西上空から)



(3) SD 76 土層 (北から)



(4) SE 55 土層 (南東から)



(5) SE 55 掘削状況 (南西上空から)



(6) SK 80 完掘状況 (北西から)



(7) SK 85 完掘状況 (北東から)



(8) SK 155 完掘状況 (南から)



(1) SX 100・105 検出状況 (北から)



(2) SX 100 土層 (南東から)



(3) SX 105 土層 (北から)



(4) SX 100・105 完掘状況 (北から)



(5) SD 120 完掘状況 (北東上空から)



(6) SD 125 完掘状況 (北東上空から)



(7) SB 1 北部完掘状況 (北東上空から)



(8) SB 1 南部完掘状況 (北東上空から)

図版 4



(1) SB 1 P 5 礎石検出状況 (北東から)



(2) SB 1 P 6 礎石検出状況 (南東から)



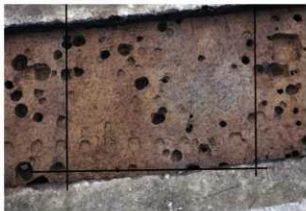
(3) SB 1 P 7 遺物出土状況 (北東から)



(4) SB 1 P 8 土層 (北東から)



(5) SB 2 北部完掘状況 (北東上空から)



(6) SB 2 南部完掘状況 (南東上空から)



(7) SB 2 P 3 土層 (南東から)



(8) SB 2 P 17 礎石検出状況 (南西から)



(1) SB 2 P 18 礎石廃棄状況 (北東から)



(2) SB 2 P 20 礎石廃棄状況 (南東から)



(3) SB 2 P 21 土層 (北東から)



(4) SB 2 P 22 礎石検出・遺物出土状況 (南東から)



(5) SB 3 北部完掘状況 (北東から)



(6) SB 3 P 1 礎石検出状況 (北西から)

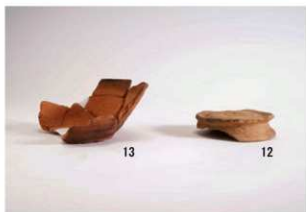
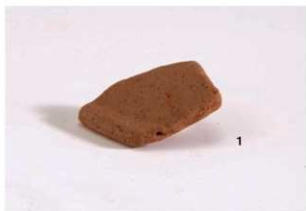


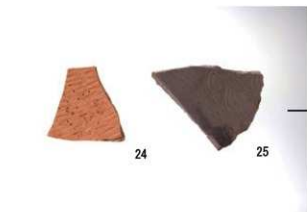
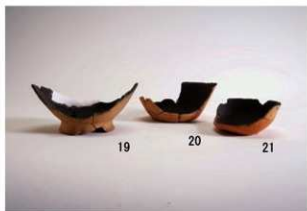
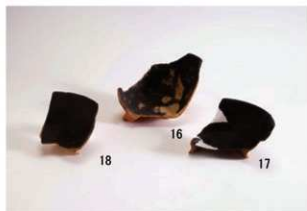
(7) SB 3 P 2 礎石検出状況 (北東から)



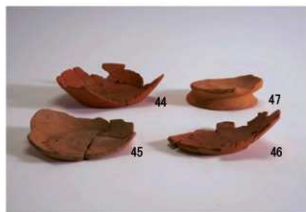
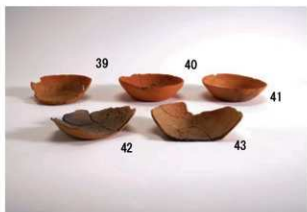
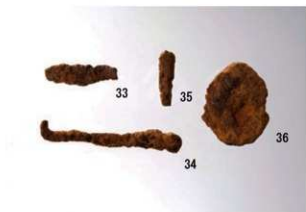
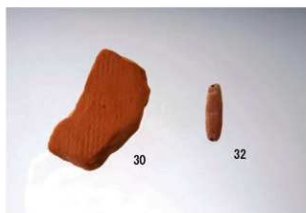
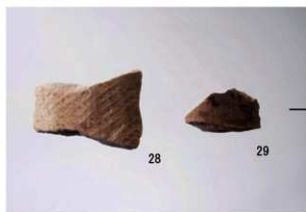
(8) SB 3 P 3 礎石検出状況 (北東から)

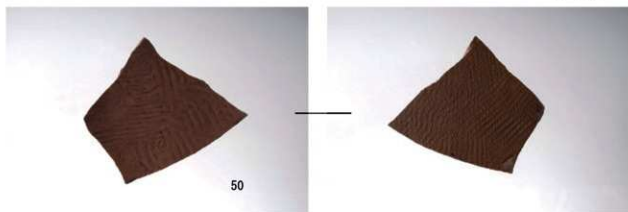
图版 6



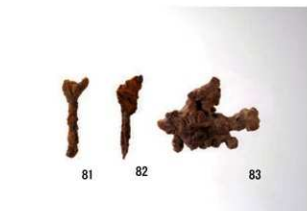
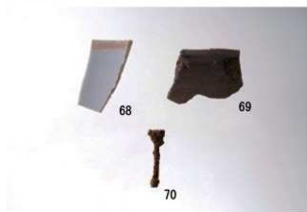


图版 8





图版 10



報告書抄録

| ふりがな | しらごういせき（くるめふりよしゅうようじょあと）－だいじゅうはちじはっくつちょうきほうこく－ | | | | | | | |
|---|--|--------------------|--|--|---|---|----------------------------|------------|
| 書名 | 白川遺跡（久留米俘虜収容所跡） | | －第18次発掘調査報告－ | | | | | |
| シリーズ名 | 久留米市文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第411集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 西 拓巳 | | | | | | | |
| 編集機関 | 久留米市 市民文化部 文化財保護課 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 Tel 0942-30-9225 Fax 0942-30-9714 E-mail : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2019年（平成31年）3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 白川遺跡 第18次調査 | 福岡県 久留米市 国分町 171-14 | 40203 | 030631 | 33° 17' 29" | 130° 17' 25" | 20180109 ～ 20180319 | 277 m ² | 記録保存 調査 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 | |
| 白川遺跡 第18次調査 | 集落 近世以降の 単独遺跡 | 古代 中世 近代 | 柱列 掘立柱建物 溝 井戸 土坑 波板状凹凸面 溝 柱列 掘立柱建物 | 1条 1棟 3条 1基 3基 2基 2条 1条 3棟 | 土師器、黒色土器、須恵 器、陶磁器、古瓦、土製 品、鉄製品、銅製品、ガ ラス製品 | 古代の波板状凹凸 面や、久留米俘虜 収容所の建物跡を 検出。 | | |
| 要 約 | | | | | | | | |
| <p>調査地点は高良山から派生する洪積土地上に位置し、筑後国分寺・国分尼寺の南東約500mに立地する。また、第一次世界大戦に伴い大正4年（1915）に設置された久留米俘虜収容所の敷地内にあたる。</p> <p>検出した古代の遺構のうち、柱列や掘立柱建物、土坑は筑後国分寺と国分尼寺周辺の集落の様相を示す。また、波板状凹凸面は隣接する調査地点の検出遺構から、複数の道路が存在したことを示唆する。中世の溝は、隣接する調査地点で検出した区画溝の続きにあたる。近代の遺構の内、3基の掘立柱建物は控え柱の柱穴や地下式礎石の存在、ビール瓶といった出土遺物から、久留米俘虜収容所の下士卒バラックの建物とみられる。平面図との比較から、収容所の第12～14号バラックと考えられ、第11～17次調査で検出された建物群の続きにあたると思われる。</p> | | | | | | | | |
| 土木工事の届出日 | 平成29年10月2日 | | | 遺物の発見通知日 | | | 平成30年3月26日 (29文財第1762号) | |

白川遺跡

(久留米俘虜収容所跡)

— 第 18 次発掘調査報告 —

久留米市文化財調査報告書 第 411 集

平成 31 年 3 月 31 日

発 行 久留米市教育委員会

編 集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

印 刷 永松印刷

久留米市中央町 20-22

